
爆撃淡路島

足小指 打蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

爆撃淡路島

【Nコード】

N6182C

【作者名】

足小指 打蔵

【あらすじ】

郵便ポストから右腕が抜けなくなった元パンクロッカー、権田原溜蔵は、右耳を失った謎の老人、楊眠眠との邂逅を経てパンク界に華々しくカムバック。だが、そのパンクはいつしか日本全体を滑稽の渦中に巻き込み、不条理のどん底へと叩き落とすのだった。押し寄せる群衆。狂乱のオンステージ、オフステージ。街は燃えている。そして、楊が仕掛けた罠からの逃亡を図る溜蔵がついに選んだ最終手段とは……

零（前書き）

当小説にはブラックジョーク、毒舌めいた表現が時折出てまいります。よって、読む人によっては心象を害される場合があるかも知れませんが、作者の本意は特定の個人、団体、職業、人種、思想などを中傷する事ではなく、飽くまでストーリーの一環として上記の表現を採用するものですので、何卒ご理解賜りたくお願い致します。

郵便ポストから右腕が抜けなくなり、いったいどれだけの年月が経ったのだろうか？

彼、権田原溜蔵は帝都下に於ける条虫区談合町の路上で今日も一人途方に暮れていた。

なにせ、このたった縦三センチ、横十七センチの定型ハガキ投入口に右肘の関節までもがずっぽりと嵌ってしまっただけに事態は相当深刻と言える。そんな彼に対する通行人の視線は冷たい、若しくは、畸形の者に向けられるそれである。が、そんな視線にも彼は今やすっかり馴れてしまっていた。

どうしてこんな事になってしまったのだろうか？それがどうにも思えない出せない。

とある夜に溜蔵はこの界限でベロベロに酔っ払い、路傍に転倒するなどしてそのまま記憶を無くしてしまったのだった。別段、そのこと自体は彼のようなアル中にしてみれば何ら珍しい事でもなく、言うなれば雨に降られるのと大して変わらぬぐらいの日常的な些事である。

しかし次の朝、気が付けばこの場所でこのような有様と成り果てていた。誰かと喧嘩でもしたのか？それとも、ただもうわけも分からず自分自身で右腕をポストに挟み込んだのか？当然の事ながら、このような事態となった当初は大騒ぎだった。官憲から消防局のレスキューから、拳句の果てには自衛軍までもが溜蔵を救出せんと大拳して出勤してきた。無論、大勢のマスコミも詰め掛けるところとな

り、テレビ皇国などはただそれだけの事で、溜蔵本人が見る事はもちろん叶わなかったのだが、二時間の特番を組んだというのだから随分と馬鹿げた話ではある。

が、結局、溜蔵が助けられる事はなかった。

問題の郵便ポストは今時珍しい円柱型の頑丈な鑄鉄製のものであり、鑄鉄の外皮の肉厚は極めて厚い。故に、ハガキ投入口周辺のみを焼き切る、などといった生半可な方法は全く通用せず、そうになると、状況が状況だけに溜蔵を救出する方法としてはあと二つ、郵便ポストそのものをぶち壊すか、或いは溜蔵の右腕を切断してしまうか、という最終的且つ究極的な手段しか残されなかった。そしてそんな状況が判然とするや、溜蔵を救出しようとする周囲のそれまでの氣勢は目に見えてたちどころに萎えてゆくところとなり、今に至っては、その救出策について云々する者すら誰一人としていなくなっていたのだ。

そこへ現れたのは条虫区役所の大杉福利厚生担当部長五十四歳。或る時、この役人は溜蔵のところをふいと訪ね、あるうことか今後の生活支援を交換条件として右腕切断案の採用を溜蔵に迫ったのだ。しかるにその提案たるや、右腕がポストから抜けなくなって困っている善良な区民を何とかして助けてあげよう、との公僕として本来持つべき崇高な滅私奉公的善意からのものでは決してなく、寧ろ、どこの馬の骨が知らぬが郵便ポストに腕なんかを突っ込みやがって迷惑千万、そんな馬鹿者の右腕などは切り落とそうがどうしようが一向に構わぬのだから面倒な問題はさっさと片付けてしまおうといった横柄極まりないやつつけ仕事の発想からのものに違いなくて、それが証拠に、この時の大杉の溜蔵に対する態度ときたら実にふてぶてしく、憎憎しく、傲岸不遜に過ぎ、よってそれは溜蔵の即座に拒否するところとなったのである。

「何人たりとも俺を不具者にする権利などはない。それに俺は一応条虫区民だ。区民の幸福を守るためならポストの一つや二つぐらいぶっこわすのが公僕としての本然ではないのか？顔を洗って出直してこい」

溜蔵がそう答えるや、大杉は、それではポストぶち壊し案について鋭意検討するから少し時間をくれ、但しポストを壊すとなると代替ポストの設置等も必要となり、すぐには予算が下りないかも知れないよ、などと捨て台詞を残し、その場を去っていった。

そして、それっきりだ。

結局、あの年度の予算には通らなかったのか？しかし一説には、再来年にこの界隈の区画整理が予定されており、その時にどうせこのポストも取り壊すのだから、それまであんな馬鹿は放っておこう、という結論に至ったとの噂もあり、真偽は未だ不明のままである。なめてるのか。

一（前書き）

当小説にはブラックジョーク、毒舌めいた表現が時折出てまいります。よって、読む人によっては心象を害される場合があるかも知れませんが、作者の本意は特定の個人、団体、職業、人種、思想などを中傷する事ではなく、飽くまでストーリーの一環として上記の表現を採用するものですので、何卒ご理解賜りたくお願い致します。

しとすると全くもって人を小馬鹿にしたような陰鬱極まりない霧雨降りやがる水無月の或る日、溜蔵の前に一人の老人が黙して立っていた。

年齢は九十ぐらいであろうか？相当の高齢に見える。かつての戦争でも失ったのか、右耳がない。左目の上瞼は、それが積年抱え続けて来た地球の重力に抗うのをはや完全に諦めきつたが如く重々しく垂れ下がっている。恐らく、その様子では左目の視力は殆ど失われている事であろう。顔面の表皮からは水分はたまた脂分といった養分が既に徹底的に失われ、ありとあらゆる代謝が停止し、その細胞を構成する分子はとうの昔に死に果てて本来の機能を全くのところ放棄してしまっていてなお、そこに執拗にもまるでスラッジのように堆積沈殿し続けているが如き荒涼たる様相を呈していた。しかるに、よくよく我が身の上と比較するにつけ、この老人の老いっぷりは決して憐れむべき類の対象ではないであろう、などと溜蔵はぼんやりと思う。

形有る物、この世界に存在する限り、経年変化は例外無く免れられない。木は朽ち、鉄は錆び、そして生き物は老い、死ぬる。この老人に訪れた老いは等しく万人にも訪れるものだ。更に突き詰めて考えれば、この老人の右耳がすっかり失われてしまっているという痛々しい有様さえ、先に察したが如く、それが時の戦乱に於いて負った名誉の負傷であるとするならば、それは悲しくも一時代の必然であつて、強ち不自然な畸形とは云い切れぬのであつた。仮にその失つたものが片目であろうと片腕であろうと片脚であろうと片金玉であろうと、だ。

反して、溜蔵の今置かれている状況はどうか？郵便ポストのハガキ投入口から右腕が抜けなくなってしまうというこの状況は？これほど不自然なものはない。これを畸形と云わずしてなんとする？右腕の付け根までずっぽしと嵌っちゃっているのだ。ポストに。

肘の関節部分の断面積がハガキ投入口の面積に比して絶対的に大きい故に、それが障害となつて右腕をハガキ投入口から引き抜く事が出来ない、という物理的事象はどんな阿呆でも分かる。しかし、それでは何故、ハガキ投入口に、それに比して断面積が絶対的に大きい筈の肘の関節部分を経て付け根部分までも右腕をしつかりとインサートし得たか？という疑問に至つては、如何な科学的検証を以つてしても絶対に解明出来るものではない。それは「謎」など言つてしまえば格好もよいが、極めて無意味な謎である。そしてその無意味さは、老人を見舞つたところの必然とは正に対極を為す……そんな取り留めのない思慮に耽るにつけ、溜蔵は再び己を見舞つた不幸、その不幸の無意味さを憂い、一人嘆息するのであった。

そこへ老人は、口を開く。

二（前書き）

当小説にはブラックジョーク、毒舌めいた表現が時折出てまいります。よって、読む人によつては心象を害される場合があるかも知れませんが、作者の本意は特定の個人、団体、職業、人種、思想などを中傷する事ではなく、飽くまでストーリーの一環として上記の表現を採用するものですので、何卒ご理解賜りたくお願い致します。

二

「中外画句末魚無部羅於、紗佛殺混交肴美味善無善好好抹殺餃子、
印西梵天無駄脂肪燃」

さて、このように老人より話し掛けられた瞬間、溜蔵は「またか」
と思った。辟易した。

わが国が先の大戦に敗北を喫して以来、外人種が取り分け多く
流入し、現代でも依然として多く往来するところのここ談合町に於
いて、通りすがりの外人人から右のような何語だかさっぱり分から
ぬ言語でもって話し掛けられる、という事自体は別段特殊な体験で
もなんでもなく、かてて加えて斯様な珍奇な状況に置かれた溜蔵
のような人物に興味をもって話し掛けてくる輩、ときたら、寧ろ専
らこういった外来人ばかりに限られた。ところが問題なのは彼ら彼
女ら独特の物見高さ、無遠慮さである。風俗、習慣の違いからなの
か？それは我々日本人にとって掛け値なしに鬱陶しく（例えば彼
ら彼女らは、遠巻きに遠慮がちにその光景をちらと横目に見てはそ
そくさと去ってゆく奥床しい日本人達をよそに堂々とポストを取り
囲み、溜蔵にはさっぱり理解出来ぬところの言語でもってさんざめ
き、あまつさえへらへらと笑いながら溜蔵の肩をぽんぽんと気安く
叩き、彼に対して訳の分からぬ事を楽しげに捲し立て、そうして溜
蔵が何ら答えられないのを見て取るや指差し「ひょーっほっ
ほっ」なんて笑い、しまいには笑い涙を流し流し仲間と阿呆のよう
に抱き合ったのだった）、それ故、その言語の分からなさと同俟つ
て、溜蔵はいつも彼ら彼女らには苛々とさせられていたのだ。そこ
で、こういった手合いに対する溜蔵の対処は、いつしか次のような
怒号を以って為されるところとなった。無論、全文日本語である。

「だまれ！貴様！ここをどこだと心得る！日本国だ！皇国だ！この国にいる黄色い色の人間は九割方が日本人と決まってるんだよ！日本では日本語を喋りやがれ！ここは大陸みたいに甘くねえ！単一民族国家、島国だ！日本語を喋らねえ奴は人間じゃねえんだよ！甘ったれんな！てめえの国と戦争起こすぞ！」

その台詞とて一字一句、今や完全にパターン化していたものの、大抵の外来人はこれだけで目を白黒させ、こりゃ狂人だ、かかわらぬほうが良いと退散する。ここでは何よりも日本語、ということがポイントである。そりゃそうだろう。なに人であろうとかに人であろうと、人間という生き物は基本的に自分の分からぬ言語で無茶苦茶に怒られる、という事に対して本能的な恐怖を抱くものなのだから。

ところがこの時、老人には定石が通用しなかった。溜蔵の罵声を受け、老人の口から平然と発せられたのは意外にも流暢な日本語。

「なんだ、広東語も分かんのか。無学な若造じゃな」

「無学って・・・なんだよ。日本語喋れるんじゃねえか」

「ふん、少なくともお前なんかよりは上手く喋れるぞ」

ふてぶてしいじじいである。しかし溜蔵、ついぞ先ほど存分に怒鳴り散らした手前もあって、しばらく虚勢を張り続けるより他はない。

「ふん。ま、上手いのは結構なんだけどさ、で、じいさん一体何者なんだよ？何だって俺なんか話しかける？さつさと用件をぬかせ。俺は見てのとりの有様だ。道でも聞きたいのなら、分かる範囲でなら教えてやろう。それとも、俺のこの有様を見て興味本位で近づいて来ただけなら、予めあんたの知りたいであろう事を教えと

いてやるよ。何故こうなつたか？それは俺にも分からん。俺が答えられるのはそれだけだ。さあ、用件は何だ？後者ならば、これ以上話す事は何もない。眺めるだけ眺めて、気が済んだらとっとと失せろ」

「・・・まあそついきり立つな若造。ワシの用件はそのどちらでもない。儲け話だ。ワシはお前を使って金を儲けたいのだ。勿論、お前にも儲けさせてやろう。悪い話ではない。ワシが何者なのか？何故にお前に近づいて来たか？これからそいつをじっくりと教えてやるから黙つて聞きなさい。それと、せいぜい口の利き方には気を付ける事だな。場合によっては、お前の命を奪うなど、造作もない事だ」

果たして老人の説明とはこうだ。彼の名は揚眠眠。やんみんみんと読む。広東人。幼少の頃、大戦直後のドサクサに紛れて一族郎党で不法に来日。その後、談合町で成長し、二十歳の頃にGSバンドを結成。メジャーデビューするも、GSは本来の嗜好に非ず、ふとした争いからバンドリーダーを殺害。当然ながら、十年近く臭い飯を喰らうハメになる。出所後、今度は日本では初となるパンクバンドを結成してカムバック。屠殺社とレコード契約を結ぶが、歌詞のあまりの過激さに一瞬で契約破棄。続いて狗肉蓄音機産業と契約するも、はたまた出演したテレビ番組で放送禁止用語を連発したばかりにわずか一ヶ月で契約破棄。その間にもベシストをクビにし、その替わりにベシスが全く弾けないベシストを加入させ（しかし、この前任ベシストは後のレコーディングで替え玉ベシストとして活躍）、遂に骨粉レベル社からたった一枚のアルバムをリリース。……の直後にバンド解散。バンドの新任ベシストは恋人を殺害した後、自らもオーバードーズ死。揚はというと、同様にマネージャーを殺害。逃亡。そして、以降はチャイニーズマフィアの裏社会でのし上がってゆき、現在に至っている。とまあ、一部どこかで聞いたような話であるのに加え、どこまで本当なのかよく分からないような経歴だが、とまれ、そんな経歴を持つ揚が今、何故に裏社会などとは全然関係のない溜蔵に近づいて来たのか？というところ、表面上は音楽業界から足を洗ったように見せた揚だったが、実はその後、裏社会のルートを使って音楽業界の要人を片っ端から買収もしくは恐喝もしくは誘拐もしくは強姦もしくは殺害、俄かには信じられない事だが、そのようにして現在では音楽業界をも事実上手中に収めているのであり、そこで溜蔵をパンクシンガーとして売り出したいというのだった。何しろ組織が背後に付いているのだから大ヒットは間違いないと。では、なぜ溜蔵なのか？と尋ねれば、以前

に揚は溜蔵のステージを偶然に観た事があって、そのパンクっぷりにいたく感銘を受けたからなのだという。

「まさか……じいさん。あの頃のライブを見てたのかよ？」

四

以前のステージ……そう言われてみれば、溜蔵とて心当たりが全くないわけではない。

今から十年ほど前だったか？極めて短期間ではあったが、談合町内のスラムにゴミ溜めの如く沈黙していた屑のような連中によって結成された「野垂れ死にアワビ」なるパンクバンドに参加、愚にもかぬライブ活動を展開していた時期が溜蔵にも確かに有った。

もっともその活動内容たるや、無頼の極みである。何がそんなに憎かったか？観客、共演バンド、ライブハウスのスタッフ等々の殴り合いなどは常日頃で、故にバンドメンバーの誰かが体のどこかを常に骨折しているような有様であった。そうしてステージ上に於いては楽器、機材のことごとくを破壊し、燃やした。脱糞し、それを自らの全裸の体に塗りたくっては客席へ突入した。ガスコンロを持ち込み、餛飩を茹でた。天麩羅を揚げた。九条葱を刻んだ。天麩羅餛飩は一杯四百円。野球もした。時にはペンキを持参し、ステージ上の全体を抹茶色に塗り尽くしさえた。

そしてとどめにバンドの最後というのがこれまた酷い。溜蔵本人はそんな狼藉を繰り返しながらも、しかし一方ではロマンチストというか、ナイーブというか、内省的というか、冬、窓の外の落ち葉を眺めては無性に物悲しくなり、はらはらと落涙するようなメランコリイな一面をも併せ持っていたのであって、そんな事情から、或る神無月の下旬、止むに止まれぬセンチメンタルな感情に突き動かされ、「ふい」と半ば失踪するようにして衝動的に裏山へ籠もったのだった。裏山の紅葉は見るに鮮やか。溜蔵は誰も入って来ない雑木林にテントを張り、そこでちゅんちゅら小鳥などと戯れては十日間

程を過ごした。それはそれは素晴らしい体験であつて、また来よう、などと彼は思ったものである。ところが下山した後、他のバンドメンバーとの連絡が急に一切取れなくなってしまったのだ。蓋し、溜蔵はいくつかの予定されていたライブを結果として予告なしにサボタージュしたわけで、さすがにこれには人間の屑のような奴らも立腹したのだろうか？と、溜蔵は気掛かりとなつた。そこで周囲の人間に彼らの消息を聴いて回つた。結果、ギターリストが謎の焼殺体となつて発見された事実、ベースリストはやくざの情婦に手を出して湾に沈められていた事実、あまつさえドラマーときたらエンジンエルダストをキメて又ンチャク振り回しハツテン場へと殴り込み、爾来行方が知れぬままとなつている事実を遂に知つたのである。

五

そついった過去の陰惨さもさることながら、ある日突如として溜蔵の目の前に現れた揚眠眠なる広東人の、あたかも零から巨万の利益を作り上げるが如き荒唐無稽たる提案を溜蔵が率直に受け止めた筈は無い。その内容は、通念からすれば戯言、若しくはいかがわしい甘言と受け止めるに余り有る。

しかるに、仮に今、この老人の甘言に騙されたとして、今の溜蔵に何の失う物が有るといふのか？総じて、騙されて困るのは、騙される事により何らかを失う人間である。数年来郵便ポストに右腕を突っ込んだままの彼に限り、そのような類の人間に非ざる事は想像に難くない。

そこで溜蔵は、ともすれば哄笑にも近いような嘲り笑いを続ける深層の己を巧妙に裏切り、そうしてその表層に於いて、実に狡猾な演技を以ってして楊に対する卑屈な従順の態度を見せてやる事としたのだった。些か芝居がかった快活さをも垣間見せ、使い方すらも忘れた、忘れたが故に幾分いやらしく聞こえもする丁寧言葉すらも駆使して。何故そつしたか？それは、もしも真に楊が溜蔵を騙そうとしているのなら、これは願ってもない暇潰しになるかも知らぬと思いついたからである。何しろこちらはノーリスク。楊がいくら溜蔵を騙しても、それはどこまで行っても兎戯、詐欺ゲームの域を絶対に逸脱し得ないのだ。

実のところ、溜蔵の日々は斯様に退屈そのものであった。楊の詐欺ゲームに喜んで付き合いたくなるほど暇であった。泣きたくなるほど閑居していた。郵便ポストに囚われて、どこにも行けねえし。

六

翌朝、見た事もないような夥しいレコーディング機材が溜蔵の前に並べられた。機材から発せられるゴム、樹脂等の新鮮な匂いから、それらの機材が何れも新品、つまり、最新鋭のものである事が素人の溜蔵にも想像された。

そして三十人は下らないであろうスタッフ。彼らはただの一人として全く無駄を生ずることなく、居並んだ新鋭の機材を前に、己が与えられた準備作業分担任務役割を淡々と且つ整然とこなしており、その澁みなき様が、彼らがいずれもその道に於いて相当に熟達したプロフェッショナルである事を無言の内に表していたのである。あたかも宇宙船の操縦席の如き複雑怪奇なコンソールを前にヘッドフォンを装着し、一体何の意味が有ってそれほど沢山並んでいるのやらさっぱり分からぬツマミ類及びスイッチ類及びボタン類を一つ一つこねくりまわしている者、何百本あるのやら数える気すらも起こらない大量のコードを次から次へと機材に繋いでゆく者、マイクを立てる者、意味不明なハンダ付けをする者、後にやってくるであろう演奏者連中がよほど大物なのか、あらかじめギター、ベースをケースから取り出し、莫迦丁寧に磨いた後、弦を張り、チューニングをしている者までいる。彼ら自身が演奏者でない事は、チューニング途上に於いて調弦が正しく為されているかどうかの確認音出しをする折の右手のピッキングのたどしき、弦を押さえる左手の指のたどしきを見れば一目瞭然であった。彼らの専門は楽器の演奏ではないのだ。もっとも、以前に溜蔵が演奏していた類の音楽に於いては、その程度の技量しか持ち合わせていない演奏者が居たとしても全く不自然ではなく、現にそうした演奏者が嘗て自分の周りにそれこそ当たり前のように数多く存在していたのだが。

そういえば、これらの機材とスタッフとを手配した張本人であろう楊はどこにいるのか？楊は確かに昨日、あくる日、つまり今日から早速レコーディングを始めようと言い残し、溜蔵の前から姿を消した。その際に於いても溜蔵はどうせ嘘八百であろうと内心取り合わず、いい加減な生返事を返したまでである。しかしその嘘八百は今や現実となりつつある。いくら騙されても失うものがないといえ、これだけ無闇に急速にやたらにスケールがでかくなつてくると、少しく薄気味悪くも感じるのが人情というもの。以前に溜蔵のステージをたまたま観てパフォーマンスが気に入ったからといって、それだけで一日に数百万円のコストが掛かるや知らぬ前述の機材、スタッフを急に何となく思いついたように都合する、というのはやはり何をどう考えても正常な人間の判断であるとは考えにくい。なんとすれば、自分がそのようなパンクシーンで活躍していたのは十年以上も前の事であるし、極めてアンダーグラウンドなシーンであったし、そもそもそのシーンに於いてさえ自分が他人よりも抜きん出た人気を誇っていたわけでもなかったのは、溜蔵自身も認めるところであったのだから・・・思うに、野垂れ死にアワビは万人から歓迎される類のバンドでは決してなかった。それよりもライブ中に機材を破壊された、ライブ中の殴り合いによって大なり小なり怪我を負わされた、或いはバンドメンバーがステージ上で脱した人糞が衣服若しくは人体に付着した、ベースリストに情婦を寝盗られた、ハッテン場で戯れていたところにドラマーが殴りこんできた、等々の様々な理由でもって彼らを激しく憎悪する人間の方が遙かに多かった筈である。

二時間後、溜蔵はレコーディングの渦中に有った。録音の作業は基本的に、というか全面的に、演奏者が一斉に演奏して同時に溜蔵も歌い、曲の最初から最後までを一気に録音してしまう、いわゆる一発録りの手法でもって次から次へと行われた。それが可能であったのは、溜蔵の提起する曲の全てが例外なく「CとDのコードをひた

すら繰り返すだけ」というような極めて原始的な構成を有しており、かといってその代わりに米国の黒人種の如くファンキー或いはダンスブルなリズムとかを前面に打ち出しているのか？というところと全くそんな事もなく、ギターはただ音が歪んでうるさいだけ、ドラムは何となくドンドコ鳴っているだけ、ベースに至っては弾いてるんだか弾いてないんだか見当すらつかず、肝心の溜蔵のボーカルはというと、「汗ダラダラで三日月に向かって、ぶっ殺してやると書いた旗振り回して疲労困憊」などと唾棄すべきようなたわけた歌詞をメロディーを付することなく絶叫しているだけ、といった体たらくであったからであり、その一方で実のところ、この日のレコーディングに呼ばれた演奏者というのは、いずれもレコーディングだからこそのいいようなものの、こんな音楽をライブだとかなんだとかで一般聴衆の前で演奏させられようものならば忽ち恥ずかしさのあまり人事不省にでも陥りかねないぐらいに非常に高い演奏技術と知名度とを兼ね備えた錚々たるフュージョン系の大家ばかりであったからである。そりゃあ楽器のチューニング専門スタッフも付いて当たり前というものだ。

にしても最新鋭の機材、それらを操るスタッフ、そして、ジャンル的には全く必要ないはずの高名なミュージシャン・・・返す返す、楊は一体何を考えているのか？実際のところ、一体いくらばかりのカネを積んだのであるのか？宝の持ち腐れとは正にこの事を云う。カネをドブに捨てるとは正にこの事を云う。しかし見方を転じるに、その投資の刹那さ、ある種の投げやりさ、打算のなさ、どこをどう切り取ってもパンク以外のなものでもない。とすれば、楊は真にパンクなのか？

その楊はこの日、とうとう最後まで現れなかった。

七

さて、このようにしてわずか一日で製作された溜蔵のファーストアルバム、「爆撃淡路島」は瞬く間に売れに売れ、あるうことが発表後一ヶ月を待たずして一億枚の売上を記録するに至った。

この時点に於いて本アルバムはまだ海外には発表されておらず、従って、一億枚のセールスという事はつまり、日本国内に於いて一家に一枚どころか一人にほぼ一枚の割合でもって広く国民に所有されるところとなつた事を意味する。その一億人の中には当然ながらアルバムを買う経済力を未だ有せぬ学童や、そもそもアルバムを買うや買わざるやの判断すらおぼつかぬ乳幼児などもいたわけで、そのような若年者に対しては、将来わが子が成長成人してしかるべき集団社会に所属した暁、爆撃淡路島を所有していないばかりに周囲から村八分の扱いを受け、ダサイ奴、暗い奴、虚け者、偏屈、非国民、蛇蝎などと後ろ指を指され、その誹謗中傷、迫害から逃れんとする内に何をどう間違つたか魂の救済などを求めてインドへ渡航、ガンジャまみれ、行方不明、半年後、ガンガーの聖なる流れに人知れず死体を浮かべて無縁仏、などというような羽目に陥つてはたまらぬと、いかんせん明日からの光熱費、水道代に窮する慢性的な生活不安は些かも拭いきれないものがあるけれど、大死一番、一枚三千元ぐらいの我が子への投資を惜しんでいる場合ではないと、両親が大枚をはたいて買い与えたに違いないのであった。

しかしながらこの間、言ってみれば当然のことではあるが、溜蔵とて何もせずに指をくわえ、茶の湯を立てなどし、ただひたすら白痴の如くうすらぼんやりとアルバムが勝手に売れてゆく趨勢を眺めていたのでは決してない。実際、この一ヶ月間というものの、溜蔵はありとあらゆるメディアに露出していたのである。否、正確に申し上げ

げるならば、これも恐らくは楊の仕組んだ謀略であろうからして、露出「させられていた」のである。

この間、溜蔵は雑誌、新聞等のインタビューをそれこそ片っ端から受けさせられ、間断なく行われる写真撮影グラビア撮影並びにプロモーションビデオの撮影等に応じ、離れ小島に漂着した一組のうら若き男女が土人の集落に火をつけて竹馬を奪い、その竹馬でもって島外逃亡を企てる、といったストーリーのドラマに火事から逃げようとしますが結局焼死してしまう土人役で出演し、某食品会社の即席塩ラーメンのCM出演に至っては、「粟国のクソ塩爆発炎上、食らい食らへば死屍累々、塩塩食らえ、毒まで食らえ」などとまあ一体誰が作ったのやら、しかし溜蔵が作るのとさして変わらぬような悪辣きわまりない歌詞が繰り返されるCMソングまでも歌わされたのだった。

そういったプロモーション活動の苛烈具合といったら寝る間もない程で、実際、溜蔵はドラマの撮影途中に不眠が祟って約十回、気を失った。その度にスタッフから氷の入った水をぶっかけられ、目を覚まさせられた。はつきり言っただだの奴隷である。芸能奴隷。いくらカネのためとはいえ、ここまでミュージシャンを骨の髄まで徹底的に食いもんにするとは楊、恐るべし。レコーディングの時に見られたあの大掛かりな投資をえげつなく取り戻そうとしているかのよう。

それにしてもメディアの求心力とはえらいものだ。正味のところ爆撃淡路島は、その音楽的内容たるやそこらへんに横溢する凡百のガレージパンクバンドのそれと比べて大して変わるようなものでは決してなかったし、そういったバンドのアルバムと同列の扱いをしか受けていなかったらば、マニアなどと称する余程の物好き連中は別として、恐らくは誰も鼻に掛けなかった筈の代物であった。しかる

に、こうした不眠不休のメディア露出の甲斐あって、結果的にはマニアどころか、およそパンクなどとは縁のない普通の人生を歩んでいる世の衆人　彼らがまともにその音楽を聴いているなどとは到底思えなかったが　すらも広くこの腐れアルバムを求めるところとなってしまうのだから、いやはや、マインドコントロールである。

八

月日が経つのは早い。

更に一年が過ぎた。

溜蔵はもはや押しも押されぬトップパンクスターとしての地位を確立しつつあった。

先のアルバムはその後全世界にて販売され、これまでに一体何億枚売れたのか？今や数える事すら不可能である。

揚はレコーディングの前日以来、現在に至るまで一度たりとも溜蔵の前に姿を現してはいなかったけれども、相も変わらずあの手この手を使って背後から糸を引いているには違いないうで、先のアルバム発売時に於ける狂騒的プロモーションが一段落した後、今度は間髪を入れずに大々的な興行、つまり、ライブが矢継ぎ早に企画されたのだった。

レコ発ライブの初日には全国の北端から南端、津々浦々より、凡そ八千万人ものファンが殺到した。当然ながら会場に入りきれないファンは無数。すると、寄る辺ない彼らは途端に暴徒と化し、そのようにして一夜明けた会場周辺は、空襲を受けた戦時下の街の如き荒れ果てた惨状を呈したのである。

一方、その台風の目となった溜蔵はというと、これはもう昔取った杵柄、ステージ上では大いに暴れ、爆音に負けじと怒鳴り散らかし、観客を煽り、まあ音楽ジャンルもジャンルであるし、今となってはステージ上で溜蔵が右に申し上げたような事をしようとしまいと観

客は関係無しに勝手に熱狂するのだから、熱狂の渦を作り上げたのだ。溜蔵のバックを務めるメンバーは例のフュージョン演奏大家連中である。彼らは大勢の前で斯かる音楽を演奏するのがほど恥ずかしかったのか、ギターリストはライブが開始されて二十分、ドラマーは二十五分、ベーシストはおよそ三十五分が経過した時点でそれぞれぶうぶうぶうぶうと奇声を発し、しかるのち人事不省に陥った。溜蔵はしょうがねえってんで観客として来ていたそこいらの女の子に適当に楽器を持たせ、ステージに立たせた。それで全く問題は無かった。やがて、この酔狂な饗宴に或る種の宗教的陶醉を得たのであるか？全裸となった男といわず女といわず数十人の若者がステージに勝手に上がり、さのよいよいと踊り狂い、しまいに自慰もしくは交接を始めた。さほど間を置かずして、今度は客席に於いても交接が始まった。こうなれば、もはやライブなどと呼ぶべきものではなく、いわば極めて規模を大にする公然の変態色情乱交パーティーである。人肉の大罪。サバト。神よ赦したまえ。狂乱という言葉以外、もはや何も思い浮かばぬ狂乱。狂乱といえば、オンステージも狂乱であつたがオフステージも狂乱であつた。ライブ終了後の溜蔵の周囲には一体誰が用意したのやら、何をどうやっても絶対に消費しきれぬであろう夥しい量の食物、酒、薬物、そしてグルーピーが供せられ、溜蔵は食物と酒と薬物を思うさま摂取し、女子のグルーピーはというと溜蔵の下腹部に跨り、すなわち腰を振ったのだ。それに飽きると溜蔵は、今度はグルーピー数人に命じて下半身の着衣を脱がせたるままに四つん這いの姿勢を取らせ、しかるのちに尻の肛門部分にロケット花火を挿入し、此れに点火して発射。飛距離約二十五メートルを記録。この一年間、このようにしてほぼ毎日のように挙行されたライブ会場並びにその周辺の惨状たるや、常に筆舌に尽くし難いものがあつたわけだが、楊の組織との癒着でもあるのだろうか？国家権力によるライブの強制中止、などといった実力行使措置はついぞ行われる気配すら皆無のままであつた。

しかし現金なものである。隣の芝生は常に青い。人間というのは自分が見向きもされない時には目立ちたいと思い、目立って目立ってしょうがない時には気詰まりでしょうがないものだから人目から逃れたいなどと思う、要するに全く正反対の境遇を望む因果な生き物なのであって、このところ溜蔵も後者の例に漏れず、人目から逃れ、誰とも会うことなく浜辺で一人夕日などを眺めつつ潮風に吹かれ、そうしてひらひらと舞を舞ったりしたいなどと望むようになっていた。

今や、嘗ての退屈が懐かしかった。大勢から注目されるという事は決して楽しいばかりではない。この一年というもの、有名税ではないけれども溜蔵が人目にさらされぬ時間などは殆どなく、常にその動向を注目され、注目されるだけでなく、グルーピー、リサیتال関係者、プロデューサー、アレンジャー、マネージャー、記者、観客、テレビ関係者、仕出し弁当屋、僧侶など様々な種類の人間が絶えず入れ代わり立ち代わり何らかの用事を以って溜蔵に接してきたわけで、溜蔵はすべからずそれらの人間に対して立場的には絶対的に上なのであったけれども、まあそれであつても赤の他人と接触折衝するというのはやはり大なり小なり神経が磨り減るものであつて、その点は溜蔵もタダの人、楽しい時は笑い、辛いときは人並みに泣いてしかるべきものであつたのだ。

ところが、通常の芸能人であれば、なんであれば突如記者会見などを開き、私は明日から芸能活動を一切停止します、芸能界に疲れました、絵描きに転身します、なので私をどうか探さないで下さい、かしこ、などと発表でもせんものなら、周囲のゴタゴタはそれなりに暫くあるうけれども、我が身をそこから隠匿隠蔽するにつけ、いつしかは衆目衆聞から遁れるに至り、そうして後に人里離れた山中に庵をかまえ、森羅万象に心遊ばせるまま孤独を楽しみ風流三昧、

なんてな理想的な余生の展開をひよつとかすれば期待出来るやも知れなかったが、溜蔵に限り、縦しんば今、そのような停止宣言会見を開いたとして、そうは簡単に問屋が卸さぬであろふ事が容易に想像された。

何故って？

この期に及んで、溜蔵は未だ右腕を郵便ポストに突っ込んだままの状態にあったからである。

九

何の事はない。溜蔵は今の今まで右腕を郵便ポストに突っ込んだまま、レコーディング、プロモーション、ライブ……ありとあらゆる活動を展開していたのだ。

例えばレコーディングなどは、郵便ポストの周りに簡素なレコーディングブースが一夜漬けで設営され、そこへ機材を持ち込む事によって行われた。ライブはというと、これはもうアマチュアミュージシャンが勝手気ままに行うところの路上ライブに毛を生やしたようなもので、郵便ポストの周囲に急拵えで組み上げられたハリボテの野外ステージでもって行われたのであった。その際、その一帯の交通は一時的にシャットアウトされ、そのシャットアウトされた区画が一応のリサیتال会場とはなったものの、そもそも溜蔵のポストがある通りというのは帝都環状線沿いの裏通りで、線路に肉薄したその裏通りの道路幅といったらせいぜいが十五メートル程度。そんな場所に急造した会場のキャパなどは高が知れている。何をどう頑張っても一度の収容人数は百〇百五十人ぐらいが関の山といったところで、それに納得がゆかぬのは溜蔵を一目でもいいから見ようと全国津々浦々より一族郎党でもって押しかけてきた他ならぬファン達であった。彼ら彼女らがこの体たらくに腹を立て、といつても別に誰が悪いというわけでもないのだが、それだけに却って彼らの怒りのやり場はなくなり、遂にはそのどうしようもない怒りに身を任せるまま暴徒と化す、というのもまあ、無理のないっちゃあ無理のない話。とまれ、このように右腕をポストに突っ込んだままの状態とあつては、仮に記者会見を開いて休業宣言を行ったとして、次の瞬間から当然見舞われるであろうマスコミ、若しくはファンからの執拗な追及……こういったものからは到底逃げられないわけで、結局のところは多勢に無勢、やがては溜蔵の方が根負けし、休業宣言

撤回、などという碌でもないシナリオが想像されるばかりであった。

ところがある時、溜蔵は単純な計算をやってみた。結果、彼は「逃げられない」などとは言っていない。何としても逃げねばならぬ」との強力な衝動のままに、万難を排してでも自身が何らかの行動を起こさざるを得ない状況にある事を知ったのである。

というのもこうだ。今までにこなしてきたステージの回数は約三百回。一回毎の観客数は会場キャパの問題もあって平均して百人程度と考えると、これまでの延べ観客動員数は三百回×百人＝三万人。その一方で全国から押し寄せて来ているというファンは八千万人。彼ら全員にライブを見せようと思うと、ぐわあ！あと（八千万人－三万人）÷百人＝七十九万九千七百回もやらねばならないか！更に、ライブは一日一回と仮定し、この回数を一年三百六十五日で割ると、小数点以下は四捨五入で二千百九十一年。何という回転の悪さであろうか。つまりこのままいけば、一生休みなしに働いたとしてもファン全員を満足させられる日はまず絶対に来ず、さりとて全員が満足せん限りは需要が絶える事は恐らくないのであって、つまり早い話が、溜蔵はいずれにせよ一生休みなしに働かねばならなかったのであった。事実、彼らの殆どは溜蔵のライブを見るまで頑として各々の郷里には帰らぬ腹のようで、今ではその大多数が帝都或いはその近隣に住民票を移し、結果、この一帯はただでさえ過密なのに、更に凶悪に過密化、逆にそれ以外の地域は極端に過疎化、といった具合に、我が国の地域別人口バランスは今や歴史上例を見ないまでに歪な様相を呈しつつあった。一体、行政はなにをやっているんだ？

十

行政で思い出した。

確か三年ぐらい前だったか、溜蔵が郵便ポストに囚われの身となつて暫くの頃、溜蔵のところを一度訪れ、右腕の切断による救出策をしきりに薦めてきた男がいた。条虫区役所の大杉福利厚生担当部長五十四歳である。あれから三年が経過しているのだから五十七歳か？ま、年齢などはどうでもいい。

彼は、自分の提案した右腕切断案を溜蔵から断られるや、それつきり溜蔵に対しては全くの音沙汰なしを決め込んでいたのだった。しかしあの三年前の約束、忘れもしない。確か大杉は、それでは右腕切断案の代わりに郵便ポストの破壊による救出案について鋭意検討する、但し、それを実行に移すにはポスト破壊並びに代替ポスト設置の為の予算を区として確保せんければならず、斯かる予算申請にはそれ相応の時間が掛かるであろうからその点は了承しておいて欲しい、と溜蔵に言い放っていたのだ。しかるにあれから三年。相応の時間たるや、いったいどれほどの時間なのか？いくらなんでも時間が掛かり過ぎではないか？そんなわけで、溜蔵は再度大杉を呼び出す事にした。いいかげんにこの状況をなんとかして欲しい。いまや溜蔵は全国区の有名人である。もしも条虫区役所が呼びかけに応じぬ場合、溜蔵は有ること無いことを全国ネットのテレビカメラの前でさんざつぱら喋ってやるつもりでいた。さすがにそれを恐れてか、しかし大杉は現れた。渋々ながらも溜蔵の前に。以前と同じような灰色の雨が降る日。

溜蔵はまず第一に右の疑問点について問い質した。単に忘れていただけならば素直にそう云ってくれば良い、とも申し添え。果たし

て大杉は、一応予算は毎年の稟議の俎上に載せているものの、下水道の整備、道路工事、京都議定書の制定によって一段と厳しくなった排ガス規制への対策、育児支援事業、なかよしクラブの運営、区役所内の蛍光灯取替えなど、他に優先せざるを得ない各種予算項目が山とあり、それに加えて最近では郵便局の公社化などといった問題もあって、ポストの扱いに関する管理責任所掌が以前よりなんやかやとややこしくなってしまう、まあそんなこんなで物事は中々思うように進まないのだ、などとあやふやな説明ばかりをする。対して溜蔵は、「まあ全体として分かったような分かんような説明だが、前半は何となく分かった。要するに力ネが無いという事だな。それならそうとはつきり言え。よし、ならばポスト破壊並びに代替ポスト設置の為の費用を俺が負担しよう。それならいいだろう？御承知のとおり、俺は今や大金持ちだ。多分。なので、そちらが要求するだけの額を出すから、それでもとつとこのポストをぶっ壊して俺を助け出してくれ」と大杉に改めて要求した。ところがこの大杉ときたら実に煮えきらぬ男であって、いやいや、その気持ちは嬉しいのだけれど、そのような公共事業は例外なく必ず国家或いは自治体の予算でもって行われねばならぬのであり、やはり特定の民間人からそういった事業費を特別に出させたとあっては区の収支が途端に不透明となってしまう、それを下手にうやむやにしてしまうと場合によっては贈収賄、使途不明金、などとあらぬ疑いを世論から向けられてしまう恐れも有るのであって、或いはまあ「有志による寄付」といった建前とする事も考えられなくはないんだけど、それはそれで手続きが非常に煩雑且つ面倒であり、加えて、特にポストの破壊と代替ポスト設置となると恐らくは数百万単位にものぼる力ネが動く事となるであろうから、そうなると金額が金額だけに区としては力ネの出所たる溜蔵を匿名扱いのままとしておくわけにもいかず、衆目に対してその名を大々的に公表、しかるのちに感謝状を贈呈……といった運びとなろうと予想され、それはそれで別に結構な事じゃん、などと云うかも知れないが、しかしそこには大い

なる陥穽というものがあって、つまり、溜蔵の職業は、こう云つては失礼だが一般的には反社会的なイメージを有するところのパンクロッカーっちゅうやつである、それ故、溜蔵から寄付を受けたとなると、たちまち区全体としてのイメージが悪化しちゃうかも知れないわ、といった不安が誠に遺憾ながらどうしても出てくるわけであり、そういった懸念に対し、どこまでの職制の人間がどのような判断を下すか、というのは正直に言うとな自分のレベルではとんと見当がつかぬ、など一向に埒が明かぬ弁明を繰り返しては恬然としていたのだった。

えい。もういい。やめだやめだ。人がせつかく「自分の救出に掛かる費用を自身で負担しよう」などと百歩も千歩も譲った案を提示してやっているというのに、なにが区のイメージだ。なにがパンクのイメージだ。溜蔵は、役職だけは立派なくせに斯かる瑣事ですら自分一人の判断でもって全く決定出来ぬ大杉の区役所内に於ける極めて中途半端な立ち位置、といったものを俄かに垣間見たような気がして、なんとなく意識の片隅がうすら寒く凍るのを感じた。そしてそうした立ち位置は、後ろ向きな損得勘定にのみ長け、物事が上手く立ち行かぬ理由ばかりを常に自己弁護のために並べ立て、そのくせ、ではどのようにすれば上手く行くか？といった前向きな議論には参画する素振りすらもこれ見せず、それでいて他人を何かにつけて小馬鹿にして憚りない、といった外ならぬ大杉本人の非建設的な資質そのものが齎した結果であること一目瞭然であつて、溜蔵としては、これ以上なんら解決策を見出だせぬまま、この非建設的な男と非建設的な水掛論ばかりをいたずらに重ねる気分には到底なり得なかつたのである。

「帰れ」

溜蔵が一言そう吐き捨てると、大杉はさも残念、といった表情を作

って見せた。

その残念は、溜蔵を救えなくて残念、といった残念では勿論なく、自分が今しがた説明してやった行政の世界のやんごとなき事情というものをどうにもこうにも理解して貰えず残念、これだから素人ってやつあ困る、やつぱり阿呆だこいつは、といった意味合いの残念に他ならなかった。

さて、こうなるともはや行政に頼る事は出来ぬ。ここから脱出する方法を自分自身でなんとか勘考せねばならん。しかしどうやって？その方法というものがどうにも思い浮かばない。

さりとてここに至っては、大杉が以前に提案したところの右腕切断、といった方法などは殺されても選びたくなかった。なんとすれば、右腕が無くなってしまうというのもこれ実に不便な話には違いなかったし、それよりもなによりも、ここまで数年間、そういった安直な路線を頑として選ばず、道行く人の蔑視に堪え、一躍有名になつてからは不特定多数より我が身一身に注がれるところの無遠慮な注目といったものに堪えなどしてきた艱難辛苦・・・それらが全て、そうする事によつてたちどころに否定されてしまうように感ぜられたからである。最初から切断してりゃよかったんじゃん、と。嫌だ。嫌だ。そんなのいやん。こうなるともはや意地だ。

そうこう考え、しかし一向に妙案が浮かばぬ間も続く狂乱の日々。このところの溜蔵にとっては、オンステージ、オフステージ共にものはや苦痛以外のなにものでもなくなってしまうていた。

「・・・・・・！」

そんなある夜、いつもと変わらぬ狂乱のライブが看板となつてから暫くの事、誰のものとも一向判別つかぬ衣服の破片、肉片、血液、脂、体毛、体液などが散乱するにまかせた処刑台のようなステージ上、一人へたばっていた溜蔵のところへ、弛んだ二の腕を振るわせ、ぶるぶると走り寄ってくる中肉中背の女、千無香があつた。

千無香は溜蔵をとりまく無数のグルーピーの中では比較的初期の内に参加した一人であつて、四国某県出身の四十四歳。関西の某外国語大学在学中にアルバイトをしていたスーパ―でたまたまその鮮魚売り場に勤めていた学の無いしかも妻子持ちの取るに足らぬ中年男と不貞の仲となり、刃傷沙汰の末に半ば駆け落ちで略奪婚、大学を中退、田舎の両親とは当然の如く絶縁、その後もスーパ―勤めを続けつつ結婚生活を続けるが、夫との関係にもやがては倦怠の陰が落ちるところとなり、二十年目の結婚記念日にあつさと離婚、同時にタイミングを図つたが如く新たに恋仲となつた二十歳年下の荷受バイトの男と同棲生活をスタート・・・するも、今度はほどなくして男の方が若気の至りで夢とやらを追いかけて上京、遠距離恋愛、そんなまだるっこしい恋愛形態に我慢できぬのは千無香であつて、加えてやがて男からの連絡も途絶えがちとなり、三カ月後には居ても立つてもおれなくなつて自らも男を追つかけ上京、した先で男が既に別の歳相応の女と入籍していた事実を遂に知るところとなり半狂乱、悪あがきとばかりにストーカーとなるが、最終的には官憲の介入を受けるに至つて断念、といったまあ基本的に出鱈目な女であり、その後しようがないもんだから条虫区で霊能力者をしていふらふら接近。そうしていやがる溜蔵を無理繰り組み伏せて暴行陵辱。爾来、溜蔵のグルーピーを続けているのであつた。

そのような経緯に加え、この女ときたら何かにつけて周囲の関心、同情でも買いたいのか、自分はこんな酷い目にあつた、自分には力ネがない、自分は病弱だ、自分は不感症だ、誰も自分の事を分かつてくれない、昨日は体調が悪く夕食をもどした、陶芸では己の才能を発揮することができない、痔になつた、などと事あるごとに我が身の不幸ばかりを周囲に喧伝しては憚らぬ悪癖があつて、その自意識過剰な根暗さ、独りよがりな被害者意識、といった性質は周囲の

人間を兎角イライラさせ、故に他のグルーピー連中はそんな千無香を軽蔑し、煙たがり、一定の距離を置きなどしていたのである。無論、その悪癖に関して辟易するところは溜蔵とて同様であった。が、どういうわけかその一方で、他のグルーピー連中とは違って、この女に対してだけは思った事をなんでもかんでも齒に衣着せず話せてしまうような気安さをも溜蔵は感じていて、それが何故なのかは一向に分からなかったのであるけれど、とまれ、そういったわけで、溜蔵はこの女を別段遠ざけたりはしなかった。

「……」

「なんだ。またおめえかよ」

「……」

「なんだよ。気色わりいな。相変わらず陰気な顔しやがって。お前さ、脂肪吸引しろよ。脂肪吸引。脂肪がたまってたから、そんな陰気なんだよ。ああそうそう。酒飲むか？ 食いもんもあるぞ。そこらへんに転がってるから、食うなら勝手に拾って食えよ」

「……話がある……」

「だからなんなんだよ？ 言つとくが、今日は暗い話なんかすんじやねえぞ。ここんと俺も気が滅入って滅入ってしょうがねえんだからな」

「……気が滅入ってるの？」

「そうだよ。お前はいつも自分一人だけが不幸みたいな事を言うが、不幸なのはてめえだけじゃねえんだよ」

「……何がそんなに不幸なの？」

「うるせえな！ いいかげんにしろよ！ だったらさ、お前の不幸は一体何なんだよ？ いいか、俺はな、一人になりたいんだよ。一人にな」

溜蔵は例の気安さに加え、半ばやけっぱちになって口を滑らした。

「……一人になりたいの？」

「……そ、そりゃあなりたいたさ」

「……ちゃーむがいやになつたの？」

ちゃーむとは、千無香が自分の名前の読み、ちむか、を變形、「魅了する」という意味の英単語に引つ掛けて作り、自分自身で勝手に名乗っているところの渾名であつた。無論、本人以外には誰一人として彼女をそんな渾名で呼んだりはいしない。それに第一、誰も魅了なんかされてはいない。

「馬鹿な。お前の事なんか知るものか。そんなケチくさい問題じゃあねえよ。わかるだろう？くる日もくる日も俺は白痴みたいな観客どもの前でくだらねえライブばかりやらされてんだ。今日なんかは俺、あんまり馬鹿馬鹿しいもんだから、途中から歌うのやめて差し入れの八朔を奴らに投げつけたりして遊んでたんだよ。そしたらお前、あの白痴どもときたらどうだ？それもパフォーマンスだと勘違いしたのか、また例の如く興奮してステージに勝手に上がってきやがつて、ダイブしたりオナニーしたりとやりたい放題だ。阿呆だぜ阿呆。もうあんな阿呆どもの相手は沢山だ。なのに、右腕がこんな事になつてるばかりに逃げようにも逃げられねえんだぜ」

「……じゃ、右腕を切り落としたら？」

「だからそれはやだつて！」

「なんで？」

「そ……そりゃあ、いろいろあるんだよっ！」

「じゃあさ、幽体離脱は？」

「なんだそりゃ？藪から棒に。とうとうおかしくなつたか？」

「……だつてさ、魂が身体から離れたらとりあえず魂は自由じゃん。逃げようと思えば逃げられるじゃん」

「くわつかつかつ。あほかお前は？ばかですかお前は？どうやってやんだよそんなこと？病院へ行け。病院へ」

「大丈夫よ、多分」

「しつげえな」

「だって、ちゃーむが今居候させて貰ってる友達って、霊能力者だもん。前にも言ったと思うけど。霊能力者だったら何とかなるよ、多分」

「馬鹿な」

「明日連れてきたげるわよ」

「……………」

「……じゃあ、その代わりと言ってはなんなんですが……………」

「なんだよ気持ちわりい。なんだその全然似合ってねえもじもじは」

「……………て、ほしいの……………」

「ああ？聞こえねえよ。はっきり言え。このアマ」

「……………して、ほしいの……………この前とおんなじ段取りで」

「……………え？何を？この前とおんなじって……………あつ！それはっ！

ダメ……………」

溜蔵はさほど間を置かずして千無香の「段取り」が意味するところに思い当たったが、それでもワテンポ遅かった。鈍い痛みが溜蔵の側頭部に走り、ついで目の前が急速にブラックアウト、暗くなつた。千無香は隠し持っていた金属バットで溜蔵をしばき上げ、失神させたのである。しこうして千無香はうふうふうふとその無駄に分厚い唇を涎でぬらめかせ、それでもって溜蔵の器官を硬直せしめ、そうしてやおら溜蔵に跨った。なんとまあ、千無香は潜在的ネクロフィリアでもあって、こうした「段取り」でもって行われる性交は、その本来の欲望を果し得ない代わりの謂わば代償行為とも言えるものであったのだ。以前に付き合っていた男達、というのも果たしてこんな目に遭っていたのだろうか？濃い緑色のアイシャドーが気色悪い。中央に寄り気味の眼が憎々しく陰気だ。

「おほうつ！おうおうおう！おう！た……………ため、溜溜溜溜！
たった今、ちんぽが入っているのです！」

溜蔵は真っ暗な無意識の中で自らの中途半端な社交性を恥じ、そして「いつか殺してやる。この女」と。

翌日、千無香は同居人の霊能力者、毘田山栗子を伴って現れた。年の頃は二十二、三といったところか？予想外に若い。それもさることながら、その出で立ちにはセンスは別として、そこいらを往来する一般女性のそれと大きく変わるものではなく、均整の良く取れた細身の身体はストーンウォッシュのスリムジーンズと「BRACK PUSSEY」などと胸部あたりに微妙な内容の英字が書かれた微妙な趣味の真つ赤なチュニツクとでもって包まれ、セミロングの髪にはふわりと柔らかくゆるいウェーブが掛けられていた。当然ながら、そこに霊能力者としての特異性は片鱗すらも窺い知られるものではない。もつとも霊能力者であるからといって、それと分かる風体をしておらねばならぬ、といった謂われはどこにもなかったわけだが。

しかるに、それでは山栗子の風体はどこをとっても全く奇抜ではなかったか？と言われれば果たしてそうではなく、否、実のところ、先に申し上げた部分以外のただただ一点に於いて、さりげなく、しかし圧倒的なまでに奇抜というか異様な点が有って、それは一体何か？と問われればつまり、山栗子の顔面に施されたるメイクというか、むしろ模様とでも言うべきか、が、真に珍妙、奇異というか、まあはつきり言ってしまうえば非常に気色悪く、もう少し具体的に言うなれば、太さ三ミリメートル程度の黒い真つ直ぐな縦線、これが顔面隈なくにびっしりと二ミリメートル程度の等間隔を空けて描かれている、という点であった。それは細かい格子縞模様、などと言ってしまうえば可愛らしい。しかるに格子縞であろうとなにであろうと、未開の地の蛮族でもあるまいし、そのような模様を顔面に施すと云ったこと自体がやはり此れ現代文明社会に於いては明々確々に異様、異質以外の何物でもないのであり、加えて、一寸離れたところから見れば、その顔は単純に真つ黒に塗り潰されたようにも見え、

例えば夕暮れ時、人気がない路地裏にて万一そのような真つ黒顔が対面から歩いてきた場合、それに遭遇する人はまず十中八九がぎゃつ、などと飛び上がり驚き、そうして逃げ出すであろくに違いないと想像されるまでに不気味なものであったのだ。

それは溜蔵とて例外ではなく、さすがにぎゃつ、とは言わなかったものの、そのあまりのインパクトにただただ圧倒された。

「あ、あ、あ、あの……その顔面」

「ああ、これ？気にしないで。一応霊能力者つつ事で」

山栗子は事もなげに答える。

「……は……はあ、そう……あ、それでさ、その千無香が言ってたんだけど、幽体離脱なんての？出来るの？」

「簡単よそんなの」

単刀直入に核心の話題に入るも、山栗子の態度はなおも涼しい。

「幽体離脱したらどうなるの？」

「どうなるって？」

「……いや、だから例えば、離脱した幽体はどういう状態になって、どういう物の見方、感じ方をしたりするのか？とかさ」

「幽体？幽体になっても物を見たりする事は出来るし、音を聞いたり、考えたりする事も普通の人間と大して変わらずに出来るわよ。残存意識つつうのがあるから」

「じゃあ、普通の人間と何も変わらないのか？」

「馬鹿ね。そんなわけないでしょ。靈魂には物理的な実体は無いのよ。だから、自分以外の物体に触れる事は出来なくなるし、それに自分の姿も他人から気付いて貰えなくなるわ。表に出てみれば分か

るわよ。通行人はみんな遠慮無しにずんずん突進してくるし、車も避けてくれなくなるから」

「なんだ。そりゃあつまらんな」

「あら？そうかしら？」

「だってさ、それだったら何も出来ねえじゃねえか。体が無かったら」

「だったら、まあエクトプラズムになるっていう手もあるけどね」
「なんだそれ？」

エクトプラズム（Ectoplasm）とは、霊魂の姿を物質化、視覚化させたりする際に関与するとされる半物質、または、ある種のエネルギー状態のものを指し、霊魂が体外に出る場合、通常は煙のように希薄で、霊能力がないと見えない場合が多いものの、このエクトプラズムの形態を介せば高密度で視覚化がある程度可能となり、それは白い、または半透明のスライム状の半物質となつて、そこにいる霊が利用し物質化したり、様々な現象を起こす事が有ると説明されているものである。

そして山栗子曰く、正にこのエクトプラズムの形態を以つてすれば物質化が可能故、これを上手く利用すれば、通常の幽体とは違って他人からも認識され、また自分自身も人や物に触れたりする事が出来、すり抜けたりもせず、つまりその点に於いては、生体とさして変わらぬ振る舞いが出るらしいのであつた。

「とは言つても所詮はハリボテみたいなものだから、それでも普通の生体とまるつきり同じような日常生活が送れる、というわけではないわ」

続けて山栗子は言う。

「なにせ内臓が機能しないわけだから、食べたり飲んだりはず出
来ないわね。必要ないし。それに・・・あなた好きそうだから敢え
て先に言っとくけど、セックスも無理。仮に性的興奮を催したとし
ても海綿体がないし、それを充血させる血液もないから、ふふっ、
はつきりいつて不能よ。精子を作る精巣もハリボテだしね。ま、要
するに、生体が内臓を以ってするような所作は極端に制限される、
と考えてもらって差し支えないわ」

「それなら息も出来ないのか？声も出せないのか？」

「その真似事ぐらいなら出来るわよ。呼吸器なんてただのポンプだ
し。何？幽体になってからも歌いたい、とでも？」

「いや。別に。なんとなく」

「あ、そうそう、話は変わるけど、エクトプラズムの物質を維持し
ていくための栄養補給は必要よ。栄養というか、成分。エクトプラ
ズムの主だった構成成分はタンパク質。だから……そうね、例えば
豆腐とかを一日に一回は全身に塗り込まないといけないわ。別に豆
腐でなくても、タンパク質を含んだ食品であればなんでもいいんだ
けれど」

「それをやらなかったら？」

「腐るわ」

「ひえ」

「一日でもサボったりしたら、次の日には腐った死体みたいな臭い
がするようになってよ。だから、これだけは絶対にサボっちゃダメ」

「うゝむむ……」

溜蔵は唸った。唸ってみたが、実のところ、さして悩むところもな
かった。

エクトプラズムとなるにあたっての制約には確かに何かと邪魔くさ
いものがある。けれども、ここに至って漸く出揃った脱出案をそれ

では、と消去法でもって取捨選択するにつけ、エクトプラズム案を除いて選択肢は最早なんら残されていないかのように思われた。右腕切断などは先の通りもつてのほかであつたし、さりとて早まってグルーピーなどをもつてして郵便ポストを破壊でもさせようものならば、忽ち器物破損の首謀者として官憲に身柄を拘束されようこと火を見るより明らかであつて（まあ情状酌量の余地もあるのだろうが）、そうなるに残る手段は千無香が提案したところの幽体離脱が、仮にその手段を採つたとして、姿形のない、物にも触れられないような幽霊になつてしまつては、せいぜいがそこいらへんを遊弋、そぞろほつつき回り、気が向いたら女湯を覗くぐらいの事しか出来なくなつてしまふわけであつて、それはそれでのんびりしていて誠に結構な事かも知らんかつたが、しかしそこは世知辛い現代日本人の事、そのような変化も娯楽も刺激も無い生活には恐らくはものの半日と待たずに飽きてしまふであらう、と予想されたのだつた。溜蔵は当初、一人になつてぼんやりと出来る時間さえ持てれば良い、などと殊勝な事を考えていた。しかしこうなつては、半ば義務感にも似た欲が俄然出てくる。それが人情というものだ。休んでぼんやりするぐらいなら、どうせなら遊びたい。遊ばにや損損。その点、エクトプラズムになれば一応は物理的な体を得られるわけであつて、ハリボテであらうとなんであらうと、とりあえず体一つさえあればパチンコぐらいは出来るだらう。セックスは出来ないにしてもナンパの一つだつて出来るだらう。テントを持ち出して再び裏山に籠ることも出来るだらう。

離脱決行は翌朝の午前六時とした。なんとあれば溜蔵の周囲が閑散となるのはこの時間帯の一瞬を置いて他に全くなかったからであり、これより少しくも早い時刻となれば、前夜のライブの狂騒的な余韻を引き摺った観客の残党どもが溜蔵の周囲で未だ騒ぎ立てていたし、逆にこれより遅い時刻となつて日が高くなると、今度はマスコミや各種マネージメント、プロモーション等々に従事する人間が自らの業務を他に先んじて遂行せんと溜蔵のところに多く殺到してくるのが既に日々の慣わしとなつていたからである。

にも関わらず当日の朝、山栗子は約一時間半も遅刻してやつて来たのだつた。その理由は単純明快。寝過ぎたのだという。ところがこの日に限つて、幸い、且つ不可解な事に、彼女が漸く現れたその時点に於いて、現場周辺には人つ子一人の姿をも認められなかった。道路の向かいに不正に路駐をされた白い自家用車のボンネット上でついぞ先ほどもまで三時間に渡り暗黒舞踊を披露、の後に突如口から青紫色の液体を吹き出してそのまま失神、爾来、ぴくりともせぬ浪人生風の青年一人を唯一の例外としては。

この日、山栗子の例の顔面格子縞は前日の黒色から緑色に変わつていた。縞一本一本の幅、及び間隔は、前日のそれよりもやや広くなつていた。それでも気色悪い事には何ら変わりはない。変わらないどころか、恰もその様は何らかの配合を間違つて培養されてしまった人工西瓜のようにも見え、故に、より一段と気色悪く、しかし一方で滑稽にさえも見えたのだつた。かてて加えて彼女はこの日、身の丈一尺程もあるう仏像を首からペンダントのようにしてぶら下げていた。

しかるに、溜蔵にとつてみれば今、そのような山栗子の珍妙さなどに一々とかかずりあっている場合ではない。只でさえ一時間半を既に浪費してしまっているのだ。いつなんどき例のプロフェッショナルリズムの仮面を被った世にも俗悪なエゴイストどもが襲い掛かってくるやとも知らぬ逼迫したこの状況下に於いて、脱走は遅滞無く、速やかに、秘めやかに、隠密裏に行われねばならぬ。いや、既に遅滞は生じている。ならば、生じた遅滞は取り戻せないまでも、有耶無耶に葬り去ってしまうべし。そのような焦躁に突き動かされ、溜蔵は遅れてきた山栗子に対して、あまり紳士的とは言えぬ態度でもって作業の推進を促したのである。事がとりわけ事務的な手続き然と、無機質に進められる事を願いつつ。

「んもう、そんな焦らせないでよ。だいたいやつば朝六時集合つづうのはねえ、キツイっすわ実際問題。起きねえって。ぜってえ。無理無理」

「馬鹿つ。そういう事は六時に間に合つてから言えつ。ほらっ、なんでもいいから早く早く。人が来ちまったらどうすんだ」

「もうー、いいじゃんかあー。別に人なんか来たってえー」

「いいから早くつ。早くしろこらっ」

山栗子は溜蔵の火急の催促に気分をやや害したものの、まあ自分が遅刻したのも紛れもない事実であつて、その負い目から、渋々ながらも大人しく作業を始める事としたのだつた。

まず山栗子は力士の土俵入りの如く両の腕を左右方向へと拡げ、蟹股となつて腰を落とし脱力。そして前腕を真上に向けるようにして肘を直角に曲げ、その体勢を維持しつつも頭を前後、腹を左右にぐにやぐにやと振るい始めた。最初はゆっくり小さく。次第に速く大きく。次に、それは儀式の呪文なのであろうか？その動作に併せて「あなたの親子は私の親子、そこいらめつたにぼっぼらぼらぼ

つつき歩き、帰った頃には家がない、出来レースには困った江古田」などと訳の分からぬ奇怪な文句に奇怪な節を付けた奇怪な歌が繰り返し歌われる段となって、それとほぼタイミングを同じくして山粟子は溜蔵の方へじりじりと歩み寄り始めたのである。右手にはついで先ほどまで首に掛けられていた仏像。

その光景、つまり、仏像を握り締めた西瓜顔の女が頭と腹を振り振り奇怪な歌を歌いながらぼっぼらぼらと己に向かって接近してくるといった光景、は見るからに終末的であり、目を背けたくなるまでに凄惨でもあった。しかし溜蔵は今にも逃げ出したくなるような衝動を必死に抑え、もっとも逃げようにも逃げられなかったわけだが、わななき、括目して、これによく耐えたのである。ところがこの女、一体何を考えているのか？次の瞬間、左手で溜蔵の首根っこを捕まえ、そうして己が右手に掴んだ仏像の頭頂部を間髪入れず溜蔵の頭頂部へと宛てがい、あるうことか、それを溜蔵の頭蓋に振り込まんとするが如くぐりぐりとまことに激しい力でもって押さえつけ始めたのだった。

「ぎゃあああああああ〜！痛てててててて痛い痛い！な、なにすんだあ〜いきなり！」

「何よ。このぐらい我慢しなさいよ。ぼっぼらぼっぼら」

「だから何だよ！そのぼっぼらってワケの分かんねえ歌はっ！？」

「あ、ごめん、無意識の内に口ずさんでた。うるさかった？」

「い、いや……別にそれはどうでもいいんだけど……いやっ、どうでもよくないんだけど……し、しかしそれにしても……いてててててて！」

「ぼっぼらぼらりんグラビヤアイドル、セックスまみれて既得権、下劣な糞雌ファッキンカーント！」

「痛い痛い痛いっ！だから痛いっちゅうの！」

山栗子は歌い続けながらも一時は中断していた頭と腹の振りを再開した。仏像を溜蔵の頭頂に挟り込む力は益々強くなった。山栗子の左腕はいつしか溜蔵にヘッドロックを掛けていて、その腕は回り回って溜蔵の口をも塞ぎ、故に溜蔵は窒息しそうになった。

「ぽっぽら、ぽ……わはははははは！」

突如、歌から一転、大口を開けて笑い出す山栗子。その顔を見上げれば、口の右角から白い泡交じりの涎。多幸感を露とも隠さぬ腑抜けた表情。その恍惚をもたらしたものは何か？溜蔵、ほんの一瞬痛みを忘れて呆然。

「ほらっ！なにやってんのっ！あんたも真似して笑いなさい！わはははははは！」

「ぶぬぐぐぐ……だ、だから、何の意味があんだよそれに！？いでででで！」

「いいから！あんたは言う通りにすればいいのっ！どうせ説明したって分からないでしょう！わは」

「……わはわはわは……わはははは……」

「もっともつと阿呆みたいな顔でっ！笑い声もちゃんと真似してっ！真面目にやんなさいっ！わはははははははははは！」

「わ……はははははははは！」

「わははははははははは！」

「わははははははははは！」

「わははははははははは！」

「わははははははははは！」

そうして一体どのぐらいの時間が経過しただろうか？いよいよもって痛みと息苦しさで屈辱と馬鹿馬鹿しさに耐えかね、いい加減に山栗子のヘッドロックから逃れようと決心しかけたその刹那、溜蔵

は夢の中で階段を踏み外したかのような、何者かに脚を引っ張られてストンと落下するかのような感覚を味わったのだった。それは些か虚脱的な感覚でもあった。

さて、次の瞬間。

「お、お。お？お！おおおおおおお！」

恐らくそのシーンは、幼少の頃に読んだオカルト雑誌のヒトコマにも見た記憶があったろう、第三者からすればそんな分かりやすいワンシーンに違いなんだろうな、などと溜蔵はふと思う。即ち、溜蔵はこの時、郵便ポストに右腕を突っ込んで白目を剥き、失禁して垂涎しつつそこにぐったりとしているもう一人の溜蔵を見たのである。

「おおおおおおおおおおおおお！」

溜蔵は図らずも驚愕し、絶叫していた。その絶叫は自らの耳に響いた。しかし他人には聴こえているのか？次いで彼は離脱した自己の体を認めようと、ごくごく自然の成り行きで、己が幽体の両手を見ようと俯く……ところが、本来有るべきところに両手を形作るものは無かった。両脚も無い。その代わり、雪の堆積の如き白い塊の片鱗が足元には見えるばかりである。これは何か？しかるに自身の幽体を除いては、ありとあらゆる外界が離脱前と全く変わらずに認められる。人事不省に陥っている青年。その青年が暗黒舞踊でもって踏み荒らした自家用車。そして己が抜け殻。つまり、視覚は有るのだ。

「まだあなたの体は人間の形をしてないわよ。離脱したばかりの初期状態だから、溶けた雪ダルマみたいな情けない格好になってるわ。」

ちよつと待つて。今、あなたの生体の形成データをそちらに転送するから」

溜蔵の物言わぬ疑問を見透かしたかのように山栗子が説明し、そして右手の仏像を溜蔵のエクストラズムにぶすりと突き刺した。・・・すると、それまで怠惰極まりない白一色の不定形を呈していたその幽体は、恰もそれが元々記憶していた本来の形状を取り戻すが如く、見る見る人間としての姿形、色彩を顕し始めたのである。そうして出来上がった完成形は、傍らで白目を剥いている生体と瓜二つ、溜蔵であつた。

「どう？改めて、今の気分は？」

「・・・すげえ・・・視覚も聴覚も離脱する前と全く変わらない。触覚は・・・全くないな。全く感覚がない。嗅覚もなさそうだ。味覚も？こりや馴れるまでに時間が掛かりそうだな・・・それにしても、俺の声は聴こえているのか？」

「聴こえてるわよ。昨日言つた通りよ。今のあなたは生体の形状をそっくりそのままコピーして形作られていて、呼吸器も声帯も生体のそれを一応は再現してあるの。だから、空気を吸い込んで吐き出し、それを音声、言語に変換するぐらいの事なら出来るわ。どうよ？ちよつとしたものでしょう？」

「確かに・・・いや、ちよつとしたどころか、大したものだ。しかしやけに体が軽いな。ふわふわとしている。人は死んだら十数グラム軽くなるというが、今の俺はさしずめその十数グラムといったところかな？」

「ご名答。きつと風が吹いたら飛ばされてしまふわね。石か何かを錘代わりに服のポケットに入れておく方がいいかも・・・の前に、服を着るのが先かしら？」

「おつと。こりやあいかん。素っ裸じゃあないか。先ずは服を買いに行かなくちゃな」

溜蔵の気分は俄に浮き足立った。羞恥は快活さに覆い隠された。自由の実感は今や郷里に凱旋する戦勝国の兵士達のように闊達な足取りを響かせ、そうして溜蔵の意識の隅々まで徐々に、徐々に染み渡りつつあったのだ。

「ちょっと待つて。焦らないで。あなたの生体に『仮魂』を入れておくから」

「なんだそれ？」

「あなたが離れている間、抜け殻になった生体をこのまま放つたらかしにしておくわけにもいかないでしょう？よいしょと……これでもいいわ。試しに近づいてみて」

「うわっ！」

溜蔵の幽体が近づいた途端、溜蔵の抜け殻は唐突にぶんぶん両の腕を振り回し始めた。しかし右腕はその付け根部分からポストに突っ込んだままとなっている故、厳密に言えば、それは振り回らない代わりに右肩周辺の一部がうねうねと波立つ。白目を剥いたまま、これは思いがけず怖い。

「おわあああ！びっくりした！」

「人や物が半径五十センチメートル以内に近づいたら反応するわ。まあ腕を振り回すだけだから、脅かすぐらいの効果しかないけど。でも、これだつて無いよりはずっとマシよ。あと、人から話し掛けられた時に自動的に返事する音声をワンフレーズだけ吹き込む事が出来るけど、どうする？」

「え。そうなの？」

虚を突かれて溜蔵は一瞬迷う。全く思いもかけず副賞の景品を選ぶ局面に立たされたようなごく軽い迷いである。さりとて留守電でも

あるまいし、たったのワンフレーズで斯かる特殊な事情、及びそれに対する己が見解、釈明を全ての第三者に対して申し述べ、そうして理解を得られようなどとは到底考えられもせぬ。

「じゃ、しょうがねえ。はい、閣下。光荣であります。」「

「なによそれ？」

「まあまあ。いいじゃんか別に」

「……まあいいわ。じゃ、これ、携帯渡しとくわ。電話帳に私の携帯番号とメールアドレスが入ってるから、何か有ったら連絡ちょうだい。あと、くれぐれもタンパク質の補給だけは忘れないでよ」

「アフターフォローまではつちりというわけか？」

「そうよ。その代わり離脱料金、生体への復帰料金に加えて離脱期間中の管理手数料も日割りできつちりと貰いますからね。精算は生体への復帰完了後でいいわ」

「なんだ、金取んのかよ？」

「当たり前よ。霊能力者だからって朝露を飲んで暮らしていけるとも思ってるの？寧ろこれは特殊技能職よ」

「そうか」

「そうよ」

「そりゃそうだな」

「そりゃそうよ」

溜蔵は傍らの抜け殻をちらと見た。相も変わらず間抜けた面をしている。口を開け、よだれを垂らし、白目を剥いている。いくら「仮魂」が入っているとはいえ、この有様では余りに心許ない。溜蔵は後で貼紙でも貼っておこうと考えた。

「しばらく体を空けます。十日程で戻ると思います。多分。戻ったらまたライブ頑張ります。多分。なのであんまりこの体にベタベタ触らないようにして下さい。宜しく。かしこ」

十四

さて、数年ぶりに進める歩。やがて数年ぶりに切り替わる身の回りの景色。依然として浮き足立った意識の中、久しぶりに見る裏通り以外の街並は自分にとってどれほど新鮮、且つ輝かしく映る事であろうか？などと溜蔵は柄にもなく思慮に欠けた期待を抱いていた。

ところが、大通りに一歩足を踏み出した途端、それは脆くも一瞬にして崩れ去ったのである。何一つ変わっていない。ただ一点、溜蔵のせいで人口密度が極端に上がった事を除いては。

溜蔵にとつての談合町とは元々、無駄に雑然としていてそのくせ虚無、どこか人の心を殺伐とさせ、月並みな表現ながら「負のエネルギー」といったものが中途半端な含有率でもってそここに横溢してけつかりやがるどうしようもなくファックな街であつた。そのくせ自分はそこから抜け出せず、長年に渡って寄生虫のようにそこに棲みついている。つまりどうしようもないのは自分とて同様。そんなどうしようもなさは数年の空白を置いて尚、斯様な紆余曲折を経て尚、とどのつまりは溜蔵を前にして何ら変わることなく健在のままであつたのだ。外からほんの一瞬覗いただけだったが、屋台村には相も変わらず不法滞在と思しき外来人数人が屯しているようだった。一角では異様に若作りの服装を纏い、頭髪には三つ編みを結い、そのためにかえって不気味極まりない、といった装いの老婆が一人立ち、両手の数珠を振り回していた。洋服は最初に目に入つた量販店ですぐさま手に入れた。官憲に見つからぬよう、物音を立てず、身を屈め、さささとゴキブリの如く量販店に飛び込み、たまたま最初に手に取ったスペースシャトルの絵を大胆にあしらつたティーシヤツとオレンジ色の土方ズボンとしましまパンツのサイズが自分に合うことを確認するや、一も二もなくそれを購入した。自分の生体

から抜き取った財布で。無論、店員はその素っ裸に目をまん丸くしたが、それに対して溜蔵は「残念な結果というのは常にわれわれアジア系人種の身の上に降りかかるものであつて、特にこの街では、そついった破鏡の破片がそこかしこに散逸しているのだ。気にするな」などと訳の分からぬ弁明をしては開き直ったのだった。

次いで足を向けたのは、郵便ポストに囚われとなる直前まで己が寢処としていた木造四畳半の貧乏古アパート。当時、溜蔵は野垂れ死にアワビを失つてからというもの、カマボコ工場の夜勤バイトで毎夜魚肉を練り、日が昇ればその日銭でもって目玉が飛び出るような安酒を人事不省になるまで呑んだくれ、意識が戻れば再び夜、カマボコ工場へと赴いて魚肉を練り、といった発展性の何一つない生活を繰り返して送っていた。このアパートは日中の不毛の現場であつた。しかるに、このアパートの住人ときたら誰も彼もが似たり寄つたりで、シャブ中、男娼、自称ファシスト、インチキ新興宗教を立ち上げようとして失敗ばかり続けている元教論、などといった選りすぐりのくだらない人間ばかりがそこには見事に吹き溜まつていたのである。溜蔵は談合町と同様、このアパートのくだらなさを心底から憎んだ。このたび溜蔵がアパートに足を向けたのは、そついったくだらなさとの決別を自分の心の中に付けようとする、いわば宛てのない一種の悪あがきの行為であつて、決して自分の部屋に立ち戻る為ではない。

果たして木造二階建てのぼろアパートは有った。さて、ここに辿り着くまで溜蔵には全くその気はなかったものの、やはり辿り着いてみれば、自分の部屋が今はどうなっているか？若干の無邪気な好奇心が芽生えてくるのを溜蔵はいくばくかの期待と共に感じたのだつた。もしかしたら、とつくの昔に引き払われているのかも知れない。寧ろその可能性の方が高い。それはそれで別に構わぬ。否、そうあつて貰ったほうが有難い。そうであれば、憎らしい自分の過去の一

つが死んでくれているという事になるのだ……そこで、溜蔵はそのみすばらしい建造物の中に足を踏み入れたのである。二階の西日が入る部屋の玄関前まで行くと、そこには下手な片仮名で「チャランポラングエンチャマチャマ」などと縦書きに書かれた表札が掛けられていた。「ン」の字が三つとも鏡で写したように左右反対に書かれている。やはり、そこは既に自分の部屋ではなくなっていたのだ。別段、そのこと自体は予想していたことであつて、どうということでもない。

この時、溜蔵が言いようもなく暗い怒りに見舞われたのは、むしろ全く別の事情からである。

耳を澄ますまでもなく、部屋の中からじねんと男女一組の談笑する声が聞こえてきたのだ。男の声は下手な日本語。女の声は流暢な日本語。やがてその談笑は女の「あんっ。あんっ」という喘ぎ声に取って替わられた。男の低い「おほ。おほ。おほーう」という呻き声に取って替わられた。ただそれだけの事である。溜蔵の怒りはひどく冷静であつた。ああ、やっぱり俺は外人人が嫌いなんだな、と。溜蔵はアパート向かいの怪しげな質屋に向かい、そこでひよつとこの面を購入、そうして再びアパートに立ち戻つた。部屋の鍵は空いているようだった。もっともそのアパートの部屋には、住人が後から自分で鍵を追設するかどうかは別として、鍵などは最初から付いていない。とまれ、溜蔵は購入したばかりのひよつとこ面を被り、嘗ての自分の部屋に堂々と闖入。土足。途端に巻き上がる悲鳴。ひっくり返る全裸の男女。男はすっかり萎縮して「くにやり」とひん曲がつた情けない陰茎を放り出し、その場に尻餅を突き、わけのわからぬ言語でもって溜蔵に罵声らしきものを浴びせている。それを見るに見る見る消えてゆく冷静。咄嗟の時に母国語が口を突いて出てしまふ、というのは公平な心理学的視点をもって考えれば全くもって止むを得ない反応なのかも知らなかったが、それであっても自

分に向かつて自分の分からぬ言語でもって矢継ぎ早に話し掛けられる、というのはやはりなんだかどうにも生理的に腹が立つ。ええい腹が立つ。くそ。そうだ。こいつらは、こんなシチュエーションでなくたって平気で訳の分からぬ言語を自分に向けて浴びせやがるのがだった。そういう奴らだ。俺が郵便ポストに囚われていた時、この男も俺のところに来てきたに違いない。やってきて、俺の分からない言葉でもって仲間内でさんざっぱら俺の悪口を言い合っては楽しんでいたに違いない。それが今やどうだ？今度はいい気になって交接なんかしてけつかるのだ。くそ。くそ。くそ。溜蔵は怒りを露にしつつ、同時に下半身をも露にした。特に意味はない。そして部屋の片隅に立て掛けられた突っ張り棒のようなもの、それを手に取った。瞬間的に蒼褪める女の顔。ますます取り乱すチャマチャマ。すると溜蔵は、その突っ張り棒を天井に向けて何度も何度も突き上げた。そうして、訳の分からぬ不気味な経文を唱え、腰を振り、機能せぬ陰囊をぶらぶらさせ、そうして四畳半を大きく時計回りに、きっちり五周周回したのであった。じつくりと。確実に。呪術的にそれが終わると突っ張り棒を男に投げつけるようにして返し、自分のズボンと下着を取り上げ、早々に部屋を出た。何もかも面白くねえ、と溜蔵は感じる。見上げると、煤けた空。

十五

このような経緯をもってして溜蔵が「旅に出よう」などと考えるに至ったのは、些か万人並みながらも止むに止まれぬ選択であったと言える。離脱した生体を残して遠く旅立つ、というのは確かに気掛かりな事ではあったが、とはいえ、一方でこのまま談合町界隈をぶらぶらしていても先の一件の如きくだらぬ出来事に一々遭遇してはイライラするばかりであって、面白い事などは何一つとして起こり得ないであろうとも思われたのだった。映画でも観てみようかと思ったが、もとよりそんなものには興味がない。ならば誰かのコンサートでも冷やかし半分に観てやろうか、と考えてもみた。が、そもそも溜蔵は、「音楽」というものの自体にさしたる思い入れを持ってはおらず、正味のところ、自分自身がパンクをやっていたのも言うなれば事の成り行きに身を任せた結果に過ぎなかったわけであって、ましてやそこへきて他人の演奏なんぞを聴く為にわざわざどこやらへと足を運ぶ、などといった発想は元来、この逆説的なパンクロッカーの持ち合わせるところでは全くなかったのである。更に身も蓋もない言い方をしまえば、溜蔵は、身の回り近辺のいかなる人工的な物事に対して基本的に全く興味を持っていなかった。人間そのものに対しても然別。故にナンパなどする気にもならぬ。肉欲もないってのに婦女子、というか他人のおしゃべりなんぞに付き合っていないられるか。あほらしくもない。そこでチャマチャマの一件の後、くさくさした気分のままに一軒のパチンコ店に立ち寄ってみた。しかしそれも十分としないうちに飽きてしまった。それをするのは実のところ生まれて始めてだったわけだが、いざやってみると夥しい銀玉が遊戯盤の中を蚤虱のようにびよんぴよこびよんぴよこ無為に跳ね回っているばかりで、しかもそれらは全くと言っていいほど盤上のポケットには入らず、そんな有様を数分もハンドルを握りしめて口を開け開け眺めている自分ときたら、もしかしたらとんでもな

い間抜けなのではないか？との焦燥に心は千々に乱れ、そのせいでこれっぽっちも面白くないのだ。幽体離脱に際し、溜蔵は形在る肉体を取得、それを使って娯楽を享受する、といった事に半ば義務感から拘泥したが、とどのつまり蓋を開けてみれば、そういった類の愉悦には食指すら動かぬであろう事が天日の下にこうして明らかとなったに過ぎぬ。嘗て籠った裏山は、いつの間にか宅地開発の為に削り取られてしまっている。これ以上、ここで一体何をしろというのだ？

そこで溜蔵は、山栗子の携帯に旅立ちを知らせるメールを打っておく事とした。

「明日、北へ旅立ちます。溜蔵」

それに対する山栗子からの返事は全く思いも掛けぬものであって、加えて些かポップに軽く、顔文字付きで、溜蔵をその後数分間に渡って当惑せしめるものであった。

「まじ？じゃあ山栗子もついていい？顔文字」

十六

翌朝の六時、帝都駅。

山栗子は約束の時刻に遅れるどころか、今度は三十分もの余裕を持つてやってきた。調子のいい女である。先のメールの遣り取りに於いて溜蔵が若干の当惑を覚えながらも彼女の同行を断らなかつた理由、というのはこうだ。つまり道中に於いて万が一自らの幽体に何らかの異変が生じた場合、その方面の知識に暗い自分であつては恐らくは為す術がない。その点、この霊能力者が近くに居れば然るべき処置を期待出来るかも知らず、そういつた「安心」たるや、一人旅の気安さを犠牲にしてもなお、大いに歓迎さるべきものであつた。己が幽体を得て未だ一昼夜。その信頼性はまだまだ溜蔵にとつて、未知数のままであつたのだ。反面、この霊能力者に対しては、溜蔵はその実績からも徐々に一定の信頼を置くところとなりつつあつた。

しかし気になる点というのは有るのであつて、それはやはり、溜蔵と山栗子、二人が旅立つてしまつた後に残される生体の事である。その世話は全面的に千無香が引き受けるところとなつた。この役回りは、潜在的ネクロフィリアである千無香にとつてみれば正に願つたり叶つたり、といったところか？今に至つて溜蔵の生体は、考えようによつては或る種の「死体」である。碧い月明かりに照らされる死体・・・それに喜々として跨がる千無香の姿・・・その光景は想像するに易く、その禍々しさは溜蔵を俄かに暗澹とさせた。それでも、その死体を見も知らぬ不特定多数の為すがまま、路傍にぼつねんと晒しておくよりかは、ある程度事情を知つた人間 例えそれが千無香であつても に託しておいたほうが、まだ幾分かはマシと思われたのである。千無香がそれを本当の死体にしてしまわない限りは。万全のバックアップ体制とはとても言い難い。しか

し、やむをえない。

ときに、それにつけても驚嘆すべきは山栗子の美貌であつた。この朝、彼女は例のおどろおどろしい顔面メイクをしてこなかつたのだ。しかし、その手付かずの素顔たるや、貴賤を超え、国境を超え、そして時代をも軽々と超え、およそありとあらゆる人類の牡を狂わせるに余りあるであろう普遍的な美を兼ね備えては今や悠然と溜蔵に微笑みかけるのだつた。高貴なる輝きを湛えた二重瞼の真つ直ぐな瞳は、矛盾するようだが、ややもすれば虚ろささえも垣間見せる悩ましげな暗さを内に秘めた。そうした緑がかつたほの暗さたるや、ともすれば長い睫毛が瞳の輝きを悪戯っぽく遮り、それによつて時に生み出される光の加減によるものだつたかも知らぬ。一方、瓜実顔の輪郭が描くたおやかな曲線は、誰しもがそこに触れてみたいと切実に望む優美極まりないものであつたけれど、それでいて計算され尽くした人工的なものでは決してなく、飽くまで自然の産物そのものである。そのくせ、それは人を本能的に惹きつけてやまない普遍的な不完全美、としか言いようのない何かを兼ね備えていたのだ。寧ろ完璧さを求めるならば、彼女の高い鼻梁と細く形の整つた眉、そして、その柔らかさ故に口づける事すらも憚られるような厚くも薄くもない薄桃色のしつとりとした唇に目を向けるべきであろう。これらの造形一つ一つは恰も一切の妥協を許さぬ厳格な職人の手によつて作り上げられた伝統的工芸品のようであつて、緻密極まりない。さて、こういった完全な部品、不完全な部品が玉石混淆の様相を呈するままに山栗子の顔に集約せられ、えもいわれぬバランスでもつて配置されたる時、そうして、それが喜怒哀楽……ありとあらゆる感情を体現した時、その美はもはや完全不完全を完璧に超越し、或いはクレオパトラのそののように、一国の命運を左右しかねない迄の神懸かつた力を遂に持つに至るのであつた。

列車はこうした危うい美と死者（幽体と生体、その二つが備わつて

初めて完全な「生」であると考えれば、今ここにいる溜蔵は紛れもなく死者である！」とを載せ、静かに走り出す。

美、そして死。この二つは図らずも共通の価値観の中に存在を誇示することが多々あって、死の中に美は見出だされ、行き場を無くした死は時折、美に身を竄いたりもする。ごくたまに、流血した死体がこの上なく美しく映るのはこの為だ。斯かる耽美的な美と死のきらびやかさ……ボックス席に対面に座ったパンクロッカーと霊能力者は実のところ、図らずもこの点に於いて、「生命」に束縛される其れをはるかに凌駕した永遠の美を紡ぎ出しつつあった。というのは嘘で、山栗子は列車に乗り込むや否や事前に購入していた帝都駅名物、合成緑蛸駅弁を喰らい始めたのであるが、そのやや小ぶりな緑蛸を口をすぼめてちゅるちゅると吸うようにして喰らうさまは全くもって正視に堪えぬ酷いものであった。

「……お前さあ、そんないい女なのに、なんであんなわけ分かんねえメーカーしてんだよ？」

「ちゅるちゅる……うぐ……あら？うれしいこと言ってくれるじゃない？そうね、あれはね、仕事の時だけよ。霊の奴らってさ、ちょっとばかり自分が変わった存在になると、結構いい気になって偉そうな態度を取ったりするのね。特に男が多いんだけど。アホよ。はつきり言つて。で、そういう奴らにナメられないように先ずはあのメーカーで奴らをビビらすの。そしたらあいつら、大体は大人しくこっちの言う事を聞くようになるわ。あいつらの自信なんて正味すっごく薄っぺらいんだから。身の程を弁えてりやいいのよ。死んだくせに」

「じゃ、俺、やっぱり靈魂としての自覚が足んねえのかなあ？」

「いいんじゃない？それぐらいの卑屈さが奴らにも欲しいわよ。仕事しにくいつたらありやしない。降霊の時なんか、自分を大物にでも見せたいのかワザと三十分も遅刻して降りてくる勘違い野郎もいるしね」

ここから話題は発展し、溜蔵は山栗子の身の上を聞くに至った。そうして分かった事は、幼少の時分より霊の姿が当たり前に見えていた彼女にとって、生身の人間も、霊も、根本的にはさほど大きく異なる存在ではない、という事である。実際、中空を彷徨う浮遊霊、電信柱の影に佇む地縛霊、死霊、生霊、悪霊、怨霊……そういったものが他人に見えず、自分だけに見える、という特殊な事情に自身が気付いたのも随分と遅く、中学二年の時のとある出来事がきっかけであつて、それまでは生きた人間と霊魂との区別すらもともに付けられずにいたようだ。

それは夏休みが明けた二学期の初日の朝であつた。その日、いつもと変わらず登校した山栗子は一学期と同じようにZ組の教室に入り、自分の席に着いた。そうしてふと右隣の席を見ると、机の上には花瓶が置かれ、白百合が生けられている……にも関わらず、その席の主たるクラスメートの島子は一学期と何ら変わることなく、当たり前のようにそこに座っているのだった。生来の霊能力者は、島子と取り分け昵懇というわけでもなかったものの、この一見風変わりな光景に思わず声を掛けた。

「島子さん。その机の上の花瓶、あんた邪魔じゃないの？」

すると、島子はさも意外、といった表情を添え、こう答える。

「え？殴田さん、私が見えるの？」

「なに言ってるの？当たり前じゃん。見えるに決まってるでしょ」

「そう……霊感があるのね……私ね、昨日の夜ね、死んだのよ」

「ふん。なんで？」

「自殺したの……」

「ふん」

「だからね、今の私は幽霊なのよ」

「じゃあ、死んだら幽霊ってのになるんだ。でもなんで見えないの？」

「知らないわよ。そういう事になってるの。幽霊は見えないの。だから他のみんなは私に気付いてないわ」

「そついつもんなんだ」

「本当に知らないの？テレビとかで時々やってるじゃない？」

「あ、ウチはアレよ。アル中のオヤジが随分と昔に二階の窓からテレビを投げ捨てちゃって、それっきりテレビは置いてないのよ。は。無くてもあんまり困らないし。どうせ買ったって、またオヤジが酔っ払って投げ捨てるだろうし」

「あ、そうなの」

「そうなのよ」

「そうなんだ」

「そうなのよ。で、葬式はどこでやるの？」

「さあ？」

……死人とこのうした奇妙な遣り取りを経て、山粟子は自身の特殊性に気付かされる運びとなった。皮肉にも死者より教えられたのである。そのようにして漸く自覚した稀有な能力でさえ、当の本人にしてみれば、例えば手の指の第一関節だけを直角に屈し、その他の関節は曲げずにぴんと真っ直ぐに伸ばしていられるとか、舌を筒っぽのように丸める事が出来るだとか、そういった子供じみた他愛もない特技程度の意味をしか暫くは持たなかったものの、それでも玩具を無目的に振り回す幼児のような気紛れさでもってその能力を弄ぶ内、霊魂は何時しか自然に見分けられるところとなった。そればかりではない。死者の言う事を代弁したり、生者から一時的にその霊魂を引っこ抜いたり、といった如何にも霊能力者然とした所作（今や霊魂の形式を選別して引っこ抜く事すら可能であるのは先に見た通りである）をも後には可能としたのである。

抜け目の無い彼女は、そうした能力が極めて利益率の高い商売に結び付くであろう事を最初から見抜いていた。事実、学生時分には、それをほんのちよつとしたアルバイト感覚で「商業的に」行った事もある。そのくせ、それを積極的に自身の職業と定めてしまうのは一方ならぬ抵抗があつて、それは何故かというと、その職業の背後及び周囲には常に「陰気さ」が付き纏うように思われたからであった。その陰気なイメージは間違いなく「死」が一般的に与えるもので、言い換えれば、或る意味で生死の垣根を乗り越えられる山粟子のような能力を持たぬ我々にとって、死は陰気なものに外ならな

い。何故か？死は不幸であり、離別であり、無であり、恐怖であり、そして悪意を以って見れば、禍々しい存在への変容でもあるからだ。一方で、山粟子にはこうした一般人の感覚が理解できない。滑稽にさえも感じる。例えば右に述べた「不幸」である。こういう事があった。山粟子とはある人づてで、初老の夫婦から「事故死した息子の声を聞きたい」との懇願を受けた。よくよく話を聞けば、三十過ぎにもなつて定職にも就かず、結婚もせず、ベーゴマをくるくると回しては遊んでばかりいた遊治郎の息子である。しまいにはベーゴマを追っかけて通りに出、そこで四トンユニック車に跳ねられて死んだらしい。馬鹿か。そんな馬鹿息子などとは基本的に口も利きたくない。しかし頼まれているのでは仕方がない。息子の霊は意外にも近く、自宅の自室にいた。そこで山粟子はいつものように両親と息子の仲介をしようとした。ところがこの親不孝者、両親との会話など端からする気もないようで、死んでいても独楽を回す方法はなにか？などと関係のない事ばかりを山粟子に聞いてくるのだ。これでは話にならない。しかるに息子が息子なら、両親も両親であつた。彼らは、彼女がやむなくこの馬鹿の言う事をそのまま婉曲せずに伝えるや、若くして命を失つた息子が可哀相だ、死んで独楽を回せなくなつた息子が可哀相だ、などと息子の不幸ばかりを嘆き、そうしてその場に泣き崩れたのである。

「死」というものが介在する、何故それだけの事で斯様に不幸となるのか！それでは生きている人間に降りかかる不幸は不幸と呼べぬのか！山粟子にとって不幸とは、生者にも死者にも平等に訪れるものであつて、それら二種類の「人間」を単に隔てるだけの死そのものを不幸とする向きにはどうしても合点がゆかぬのだった。しかし大勢はそうではない。故に、生業として死を扱う者の背後には、常にこの不幸の裏書を持った陰気さが憑いて回る。謂われもなき漠然とした観念、暗黙の了解……そういったものを取り分け嫌う彼女にしてみれば、そんな陰気さを社会より一方的に押し付けられる

のは真つ平御免であつて、それが為、成人した彼女は自身の能力を隠しつつ民間企業に五度勤めた。

いずれも続かなかつた。今度は、自分とは切つても切れぬ靈魂の存在が絶えず山栗子の邪魔をしたのだ。書類を作成しようと思えば、目の前に浮遊靈がふらふらする。上長に報告をしようとすれば、自殺した社員の靈が横から口を挟んでくる。これではまともに業務など出来よう筈もない。畢竟、こうして彼女は最初から約束されていたかの如く、自分にとっては憎き靈魂を扱う忌忌しい職業に他ならぬ靈能力者へと身を落とさざるを得なかつた由である。

さて、そんな山栗子の身の上を知る内、列車はいつしか野を過ぎ、大河を渡り、そうして日本海を目指す内に山岳地帯に入った。何ら宛てのないローカル線行である。元より溜蔵は、今回の旅の目的地を何処と定めてはいなかったし、目的地を定める程の知識を有しているわけでもなかった。生来、旅らしい旅をした記憶もなく、従って、どこそこの何を求めて旅に出る、といったお仕着せのコースを選べるほどの見聞は最初から露程も持ち合わせてはいなかったのだ。

それでは何故、旅に出ようなどと思い立ったか？ 実のところ、それは単に談合町が退屈だったからだけではない。溜蔵の、その文字通りの魂が「ここにはない何か」を焦燥にも似た想いでもって追い求めたからでもある。それは単純に「自然」であつたかも知れぬ。峻険なる山岳地帯、その合間を岩をも蹴立てて轟々と暴れ落ちる溪流、その鋭さは研ぎ澄まされた刃物のそれに似るが、それが下るに従って徐々に緩やかさを纏い、漸く人々を辛うじて介入せしめるだけの広大な川の流れと化し、そうして遂には海へと還つてゆく・・・そういういた大いなる自然を、今や超自然である我が身でもって体感したかった。とは言え、とどのつまりはその「超自然」にしても人間の勝手な思い上がりの域を出ないのは自明であつて、それは分かっている。しかし分かっているだけに、その事を敢えて彼の大自然より有無を言わず突きつけられてみたい、などと溜蔵は切に願つた。ところが今や車窓より流れ入る初秋の渓谷が運ぶ涼風ときたら、そんな溜蔵の身構えにお構いなく穏やかで、拍子抜けする程に爽やかである。涼やかである。無論、その涼やかさが触感を有さぬ今の溜蔵に直接的に感じられる筈はなかったものの、不思議と溜蔵はその涼感、ひいてはその背後に存する強大さをも「理解」した。即ち、大自然は人類の思い上がりなど意にも介さず、一個のしがない生霊

の身構えなど意にも介さず、その大いなる力をわざわざ見せ付けることもなく、そのくせ、ありとあらゆる事実を瞬時にその居住者に理解せしめたのだ！彼の対峙する相手は母なる太陽、僕たる月、そして他の太陽系惑星であつて、故に己が敷地に住み着いた羽虫などに一々構つてはおれぬ、といった風である。

溜蔵はこうした自然の威力に畏敬の念を抱き、それはそれとして、その自然の同時に併せ持つ豊穡さに目を向け、素直に享受する事としたのだつた。嘗て裏山の紅葉に見ていた豊穡さを。何度かの乗換えを経て、列車はやがて海辺へと出た。溜蔵にとっては生涯初めての日本海である。その青の濃さに溜蔵は目を見張つた。そうこうする内に時はいつしか夕刻。どちらが言い出すとも無く、溜蔵と山粟子は浜辺に程近い無人駅に降り立つた。

何と海の眩い事か！夕日が叩きつける無遠慮な光線を、海はそれ以上の無遠慮さでもつてそつけなく跳ね返し、そうして行き場を失つた光は、とりとめもない玲瓏さを以つて、今や文明社会に対する抜本的な命題を投げ掛けるようである。溜蔵がこの命題に対して答えを出す義務を免れたのは、つまり溜蔵が今現在、人間として完全の体を為していなかったから、と考えるのは余りに御都合主義に過ぎるであろうか？とまれかくまれ、彼は何も考えず、浜辺に座り、金色の海の絨毯を眺めてみた。そういえば当初、溜蔵が休みを取つた暁にやつてみたいと考えていた行為は、正にこのようなものであつたのだ。

パンクロッカーはそつと目を閉じる。すると、残された感覚は忽ち聴覚だけとなる。こうして取り残された聴覚は、己がレーゾーデールを証明せんと慌てて波の音を取り込みに掛かる。しかるにその結果、取り込まずとも我先に耳に飛び込んできたのは果たして波音ではなく、右後方からの、決して情緒的とは言えぬ怒声であつた。

「なんだよ！人が折角黄昏ようとしていたのに」

あまりの事に振り返ってみると、山栗子は怒りの形相も露に周囲の中空を睨み回し、ぐわっ、ぬがっ、ぐおっ、などと獣じみた唸り声を挙げては手足をめったやたらとばたつかせているのだった。聞けば、この浜辺の東向こうに自殺の名所とされる崖があるようで、そこで自殺した者の霊が目下、山栗子に多数纏わりついてきているのだという。彼ら無念の亡者が生きている人間にふらふら近寄ってくるのは別段珍しい事でも何でもない、とは山栗子の言であつたが、しかるに、ここで珍しいのは寧ろ山栗子の人間離れた美貌のほうであつて、死霊達はたまたま近寄つた女が絶世の美女と知るや、次から次へと仲間を呼び、今や大人数でもって彼女を囲んでいるというのだ。その数はおよそ五十人。しかしどういうわけか、溜蔵には同輩である筈の彼らの姿を見ることが出来ない。

「ぬごっ！むがっ！ぐおっ！」

「お前さあ、霊能力者なんだろ？その霊能力で追つ払つたり出来ねえのかよ？」

「そんなの無理に決まつてんじゃないっ！」

なぜ無理なのだろう？とまれ、こんな具合であつては、海原をのんびりと眺望しつつ悠久の時の楽しむなどしてられない。見ると、山栗子は見えない相手に向かって棒切れを無茶苦茶に振り回していた。なんと見苦しい事だ。溜蔵は大きく溜息を一つ。そして怒り心頭の山栗子を制し、海辺を辞した。

……旅はなお続く。各停の列車は長閑に、ゆっくりと、しかし着実に進む。再び山間部に入ったところで、差し掛かった鉄橋の上からは広大極まりない川幅の清流が俯瞰された。黄昏時の川面は薄紫

がかった鈍い輝きを発している。それは一見、不思議な色合いでもあつて、この見かけによらずロマンチストであるパンクロッカーは、こうした思いもかけぬ色合いが時に織り成される黄昏時を、その予定調和の無さが故にこよなく愛したのである。薄紫の光沢の中には幾つかの小さな黒い影が落とされていた。それは清流の只中に浮かべられし釣人の舟だ。その舟形の影より伸びた一本の細長いしなやかな影は、遠からず訪れるであろう濁りきった夜気を振り払おうとするかの如く、ひゅんと音を鳴らして振るわれた。

十八

一方、談合町にあつて主を失つた肉体、並びに、その肉体の右腕を飽きず啜え込んでいる郵便ポストの周囲には今や夥しい人だかりが出来ていた。

突如としてぴくりとも動かなくなつた溜蔵。その体には、「しばらく体を空けます。十日程で戻ると思います。多分。戻ったらまたライブ頑張ります。多分。なのであんまりこの体にベタベタ触らないようにして下さい。宜しく。かしこ」などと胡散臭い貼紙が貼られている。死んでいるわけではないようで、それが証拠に、近寄ればぶんぶんと腕を振り回す。話し掛ければ「はい、閣下。光栄であります」などと答える。答えるが、何を話し掛けても「はい、閣下。光栄であります」としか答えない。

こんな中途半端な状態であつては、何らかの医療的措置を施すにしても二の足が踏まれようものだった。加えて、この抜け殻の周囲では乾いたヘチマを両手に持った千無香が始終休む事なく踊り回り、これがまたどうして目障りな事この上ない。さらに夜になれば、この女は溜蔵のズボンをずる、と下ろして跨がろうとする。さすがにそればかりは周囲の手によって阻止された。そうこうする内、千無香は四人に増えた。すると益々目障りになった。

このようにして周囲はしばし騒然となつたのである。しかるに騒然となつたところで彼が目覚ますものでもない。そこで、周囲が右の如く手を拱いている内、まあこういう状態になつてしまっているのだから今更ジタバタしてもしょうがない、ここは一つ、貼紙を信じて暫く待つてみるしかないだろう、との諦念にも倦怠にも似た気運がいつしか騒然さに取って代わつて全体を支配するところとなつ

た。

しかしその油断がいけなかった。

溜蔵が文字通りの生きる屍となって五日目の早朝、その屍が忽然と姿を消したのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6182c/>

爆撃淡路島

2010年10月13日18時13分発行